

329
174

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 11 12 13 14

始



329-174

大正
下
書

解

大正
2. 11. 22
附交



100

秋は深くして燈下に親むべき時、まじめの讀
書に力めずして、いたづらに閑文字を弄し、
いたづらに有用時を費し、いたづらもの後
編を著せり、前編のいたづらは悪戯にして後
編のいたづらは徒らなり、されど閑に繁あり
無用に用ありとすれば、いたづら亦その間に
多少のまじめなしともいふべからず、

一樹春風千萬枝
嫩於金色軟於絲
永豐西角後園裏
盡日無人屬阿誰

いたづらもの(後篇)

浪 六 著



貧乏と苦勞が嫌で堪らぬといふものあれど、これは華族が嫌で堪らぬといふ松川廣行、かきいでも働いても生活難の今日、手腕があつても學問があつても就職難の今日、いかに奮闘するも努力するも運命の神に憎まれては智慧も工夫も用に立たざる今日、そもく祖先以來の餘慶に

二
寝て居て食へる華族が何のために嫌で面倒かといへば、その理由
よりも我この性質に於て只かくの如しとは、やはり世間に對して
辯解の面倒を省き申譯の手数を嫌がる本人の捨言葉、強ひて問へ
ば、蟲が好かぬと空を嘯く、

顔色蒼ざめて十年の苦學に猶いまた下宿料の催促を防ぎ兼ねたる
もの、眼より今この松川廣行を見れば、つまり世間しらすの罰當
りなり、あたら學士の肩書に卵子の折函を添へて走り廻るもの、
眼より今この松川廣行を見れば、つまり大名種に生れし我まゝ育
ちの好奇心なり、さらに同族の朋友間より今この松川廣行を見れ
ば、みづから進んで廢嫡せられし狂氣沙汰、加之も子爵の名譽と
財産とを一人の女に振代へし馬鹿者なり、
されど本人の廣行、ふゝんと鼻の頭に軽く笑うて曰く、醫者は死

體の解剖すれど、生きた乃公が、彼奴等のために解剖されて堪る
ものかと、

三
松川家は子爵中の第一、全華族を通じても恐らく五本の指に數へ
らるゝ富を有して、堂々たる練堀に圍まれ魏々たる和洋折衷に築
かれたる中六番町の屋敷も、我より進んで廢嫡を迫りし廣行の心
には、今この上野の森影に借屋住居の簡易生活、いかに人生の趣
味深きぞ、殆ど一種の囚はれより脱れ出でたるが如く、いち／＼
出入の大玄関に送迎せられて道路に制限ある馬車や自動車に運ば
るゝよりも、いたるところ自由自在に二本の健脚、もし勞れし時

は四通八達の電車あり辻傳あり、家に歸れば不自然に平蜘蛛の眞似をする三太夫の面でなく、生涯を我ために捧げし最愛の妻が笑顔に迎へられて、夕飯の膳の上に眞心を籠めじ手料理の一品二品、あもはず舌鼓を打ちながら誰憚らぬ談笑の境涯、いかに面白く樂しきぞ、
されど只これ一時の假住居に我身の置きどころ、さのふに勝る今日の趣味と快樂のみ、
松川廣行、もし此まゝの境涯に甘んじて此まゝの快樂に終れば、いはゆる醉生夢死の徒、たゞ華族の子息が我まゝに家を飛び出して好いた女と其日其日を暮らすのみの事、昔は風流の若隠居、今日は戀愛小説の口繪に等しけれど、この廣行が華族の門を出で、赤裸々の一平民となりしには、社會に對する存在の意味上、その

平
浪六の少漫は文を男の情あり

平民となるだけの主義あり本領あり覺悟あり、加之も風流の若隠居とし戀愛小説の口繪としては、容貌性格、あまりに不似合なる大膽の細心と驚くべき案外の奇策縱横とを備へて、世の中の戰場に武者振ひの勢ひ、また餘りに鮮明すぎたる男、いづれにせよ、うき世を忍ぶ戀の宿かと思はるゝ今の境涯は、この松川廣行を容るゝに狭く小さく頗る不調和の背景なり、
たゞ廣行がために生涯を通じて遺憾なく調和せるものは、妻として良人に冊く朝夕のキタ女のみ、

名畫より脱け出でたるが如き天生の容色品位、たとひ其まゝ華族の夫人としても、つゝまやかに身を持ちて晴がましき虚榮に憧れぬ自然の性質、今この境涯に世話女房としても、いぢらしく哀れの中にも雄々しきところありて物に動かぬ點は、もしや不幸の運

命に落ち果てし曉その艱苦に伴ふ貞女の妻としても、
六
そもや十九の年より過ぎて還らぬ二十六の昨日まで、あたら花の
色香を惜しまるゝ世間の春にも見せず、日蔭の埋れ木に捨て置か
れし時さへ、をりく通ひ來させる君の姿を女一代の冥加として、
世の一口に賤しき妾といへど、我は妻ある人に弄ばるゝ身でなく、
妻なき人の戀に靡きし身、情は猶更ら名のみ冷き夫婦よりも暖
に、いづこの誰をか羨むべき、いづこの誰に恥づべきぞ、此まゝ
の生涯を世に交はらずとも、君たゞ一人を萬人の力草とせしキタ
女、まして今は晴れて妻と呼ばれ良人と呼ぶキタ女、
月も花も廣行たゞ一人に宿せり、戀も情も廣行たゞ一人に盡せり、
身に飾る珠玉の光りも、世に競ふ榮華の誇りも、廣行たゞ一人に
代へ難し、

も
七

このキタ女に良人とせらるゝ松川廣行は、社會に向うて志い
だ達せず力いまだ伸びざるも、天下幾萬の家庭に人しれぬ悲慘を
含める今日、妻として理想の妻は既に得たり、

浪人の妻は世に求められぬ
も七 彼は昔の侍もあらずや

萬事に重々しき極彩色の華族より脱し來りて、家風も形式もない
上野の森影に閑靜なる初音町の假住居、老少の下女二人に夫婦た
だ二人の主従四人、親戚に保管せらるゝ六萬圓の五分利三千圓を
月々二百五十圓づゝの生活費に當て、春の花も秋の月も居なが
らに見る氣樂さ、葉越しに漏れ來る夏の涼風を午睡の手枕に通は
せ、樹々の梢に積る冬の雪を寒からぬ置炬燵に眺めて、浮世の萬

人に誇るべき才色兩全の妻を持ち、おのが心のまゝなる書を讀み
身を養ひ、誰に憚らず物に煩はされず天地たゞ我物の境涯、これ
で是以上の希望さへなくば、松川廣行、もはや人生に何の不足も
なし、
されど今この境涯を殆ど一種の化石視して、人生に無意味とせる
廣行がためには、やがて蒼空へ飛ぶべき羽翼を休めて暫し假寐の
果なり、

其 一

春の夕ぐれ、古風に花ちる入相の鐘の音は、芝の山内と今この上
野に残りて、ぶら〜と例のステッキを引き摺りながら歸り來れ
る廣行、
このステッキを引き摺る音と、こつ〜門口の敷石を二三度、輕
く無心に叩く癖とは、人しれぬ戀に忍び來りし時も、外に家なく
て歸り來る今も、待ち兼ねし身は、微妙の音楽、
はや入口の障子を開けて、飛び立つ心を靜に迎へ出るキタ女、こ
とし二十六といへど、知らぬものゝ眼には二十一、いかに近寄
りても三か四か、もし當世風の香粉に歳月を偷み取る人爲的の装
飾を施せば、すぎし十九の昔も今も同じ美の神に包まれて、くッ
きりと牙え渡る肉色の頬に堪へられぬ微笑を浮べ、わざと作らず

聊か太く濃き眉に却つて卑しからぬ自然の品位、いき／＼と張り切る目元に得もいはれぬ愛嬌の額越、これで藝妓ならば絶えず年中の殺人罪なり、

「お歸り遊ばせ」

廣行、無言に首肯いて、隻手に取りし帽子を渡しながら、ザツと其まゝ二階へ上れば、糸に引かるゝ如く續いて妻のキタ女、上りて三疊、襖越に六疊あれど、八疊の座敷を晝は書齋に夜は臥房の境涯、寧ろ暢氣に打寛いで、床柱を背に當てし大胡坐、歸れば例となれる妻の手前に薄茶一碗、ぐツと一息の無雜作に飲み乾して、

「も少し早く歸らうと思つたが、青山へ廻つて遅くなつたよ」
「青山、あの西田様で御坐いますの」

「さうだよ、しかし人間の氣といふものは妙なモンだね、まだ廢嫡以來、さう長くもならないが借、かうなつた今の境遇から行つて見ると、大きな冠木門に伯爵といふ西田の表札が白癡どししの眼を刺いたやうで、何だか一種の滑稽じみて見えるせ、はゝゝ、兎も角も飯を食はしてくれ、腹が空いたよ、幸ひ夕食に近いから久しぶりで是非にと引き止めたがね、つまらない献立で嫌な奴に四角張つた給仕しられるより、少々は不加減でも、やはり汝の手料理が美味いね乃公には、腹が空いた腹が空いた、ぺこ／＼だ」

「はゝゝ、只今、すぐに差上げますが、外様と違ひ、第一の御親戚でもあり、また月々の事お世話を下さる方ですもの、折角、さう仰しやるのを良人のやうに、御自身ばかりの御勝手

で、さう無愛想になさるもんで御坐いませんよ、御馳走になつて入らッしやれば宜しいに、無理に私の不加減を召上らずとも

「や、とんだところで、やられた、決して不加減ぢやアない、有難く頂戴するから早く出してくれ、贅澤は無論いはないが、けふは何だ」

「お晝飯に三品も差上げましたでせう」

「晝の事ぢやアないよ」

「ですから今夜は、一品で御辛抱あそばせ」

「する、一品で辛抱するから早く頼む、しかし一品は何だらうね」

「御覽になれば、わかりますよ」

「御覽にならない先、ちよいと聞きたいよ」

「ほ、ほ、まるで小兒のやうです事ね」

「英雄また時に兒戲を學ぶだ、人事一切の不自然を取って退けた汝の前では小兒だよ、この小兒よく保護をしてくれ、あまり遅いと泣き出すぞ」

「ほ、ほ、どんな泣き聲で御坐いませう」

「わあッ」

いかに戯けても、いかに馬鹿げても、世間普通の人間、こゝまで調子外れの無遠慮に馬鹿げ得らるゝものでなし、まして床柱に背を寄せ兩腕を組んで眞面目な顔に俄の大口を開きながら、かゝる馬鹿馬鹿しき事、門外一步の他人に對うては酔うても狂うても出来ぬ筈、心の底まで打解けて我身に許し給へばこそと、そ

の呵しさよりは嬉しさの彌増すキタ女、
我前に運ばれし膳の上を、廣行ちらと見て、はや箸を隻手に隻手
の飯茶碗を差出しぬ、

「は、ア、お手料理の一品、これかい、煎鳥だな」

「ほ、ほ、たまには良人、さういふ一品の方が宜しう御坐いま
せう」

「宜しう御坐いますがね、こりやア煎鳥でなく煎午房と煎蒟蒻
だせ、どこへ遁げたか鳥の所在が頗る不明瞭だ、よほど追窮
しないと捕まらない」

「お晝飯に良人、さんざ鳥を召上ったでは御坐いませんか、そ
の餘分ですもの」

「なるほど、よくいへば二度の勤めで、わるくいへば捨場に困

った食ひ餘りの廢物利用だね、段々と汝も、世帯人になつて
来たよ、この分ぢやア、いくら乃公が貧乏しても大丈夫だ、
は、は、しかし煎午房、なか／＼食へる、煎蒟蒻も、なか
か美味い」

元來の大食、まして空腹の夕飯、饒舌りながら普通の三人前以上
これだけでも舊式の大名家族を嗣ぐには不合格の男、そろ／＼後
で帯を弛め出す無作法に至つては、いよ／＼金屏風の殿様に不
合なり、

食後の帯を弛めし時、その懐中より掴み出だせしは、紙にも
ぬ襦の百圓紙幣三十枚、妻の前に投げ遣りながら、

「おい、それを仕舞って置いてくれ、三千圓あるよ」
「良人、此お金は」

「今日、青山の西田から借りて来たんだ」

「どうしてで御坐います」

「どうもしない、ちよいと入る事が出来たからさ、理由は後で話すが、今日その三千圓を借りるに就いて、よほど面白かつたよ、父の慈愛に賜はった例の六萬圓を保管してるからね、いづれ何か面倒な事を言ひ込んで来る乃公と思つて居たんだらう、早呑み込みに、あの中の三千圓と心得て、すぐに承知したが、いや、あれは廢嫡の砌、親戚立會の上も預け申したもので目下の境遇に應じた月々の利子を頂戴する外、一文たりとも手を著けません、もし廣行が其中の幾何をと願へば當然叱りを蒙るべき筈の金と心得ますから、別に三千圓も手許より借りたいと祈り込んでやつた、は、は、とところで三千

圓、何に入用だといふから、もし其費途を聞いた上で貸さうといふ事なら、それを聞かずに断然、おことわり下さいといふ本、まゐつた時の面が呵しかつたね、貸す奴が借りる奴に逆捻を食つて狼狽へた工合、よほど變に妙だつたよ、は、は、は、加之も今年の十月に必ず返済するといへば、ます、煙に巻かれてね、それにも及ばないといふから、また一本、まゐつてやつた、わづか三千や五千の端金で返済の期日を間違つたやア其方より此方が勘定に合はない、同じ間違ふくらゐならせめて五十萬か百萬圓、それも外に何か面白い立派な間やうでもあればだが、單に金だけでは少々、惜しいやがして間違ひ兼ねますと、真正面から吹き倒して来てとで考へて見ると、あまり手厳しく吹いて、聊か氣

たよ」

「まア良人、何といふ事を、現在お金を借りるに、そんな勝手な理窟が、よく仰しやれましたねエ」

「なアに乃公だつて、先が先だから、あゝいふ調子に浴せかけたのさ、實際また頭を下げて頼んぢやア無効だ、ぐづく小面倒な文句ばかり多くて、逆も急に出来ない相手だよ、世の中に直接の利害を持たない華族といふものは自然の習慣上、なか／＼氣が長くつて決断力の乏しい要領の得ない上に動もすれば三太夫ども、入らざる餘計な忠義立をしてね、はゝゝは何、この三千圓を借りた理由か、つまり乃公が世の中へ出る時の手辨當だよ、六萬圓の五分利で月々二百五十圓づゝあれば、當分まづ此まゝの境遇に衣食住は差支ないとしても、

たゞ生きて居るだけで生涯を送れる乃公ぢやアない、どうせ社會へ飛び出して何等か、生きてる以上の事を仕なければならぬ、ね、それに汝、多くもない一家の生活費を割いて持ち出せるかい、汝は乃公に月極めの二百五十圓で米鹽の願慮さへなからしむれば宜いんだ、外へ出ての乃公は乃公で、その三千圓を手辨當に一番、やれるだけの事を遣つて見よう、つまり汝は城を守る役で乃公は戰場へ打つて出る武者だ」

「はゝゝ、よく、わかりまして御坐います」

「しかし勝敗は時の運で進退は戦ひの常だから、をり／＼城中へ逃げ込むかも知れないよ、案外また敵の勢ひ激しく攻め來つて防ぐに遑なく、萬一こゝも落城するやうな事がありやアその時こそ夫婦もろとも城を枕に討死だ、はゝゝ、志望なら

二〇
ずと雖も、汝と刺違へて死ねば乃公も本望だ、それとも汝、
そつと搦め手から脱け出して互に手と手を取り合つた落人の
方が宜いかね、は、は、は、どうだい」

「たとひ、たとひ、どんな事が御坐いまして、此お城だけは
キタが必ず、守つて居りますから御安心あそばせ、よし月々
あの西田様から運んで下さる兵糧の途が絶えましても、絶え
た時は絶えた時で、このキタは良人に、むざむざお討死させ
ません、その代り一事、お願ひが御坐いますよ」

「急に改まつたね、何の願ひだ」

「きつと良人、あきき下さいますか」

「さくとも、今の一言に對して何でも、さかざるを得ない乃公
だ、全體、どういふこつたさ」

「外でも御坐いませんがね、良人あの癖だけは、是非」

「あの癖、どの癖だ、あまり癖が多過ぎて分らないよ」

「ほ、ほ、例の、いたづら、悪戯にも事を變へて良人、罪で御
坐いますよ、新聞の廣告で人を欺して、わざと淀橋の空地
へ連れ出したり、かはいさうに女學生の秘密を素ッ破ぬいた
り、高利貸を黒袴へ入れたり、年の暮に呼び寄せて沸湯を呑
ましたり、その他いろいろ、ほ、ほ、まア何が面白いのでせ
う、御自分だつて第一お手数のかゝる事ぢやア御坐いません
か、あれが良人の悪い、御病氣ですよ」

「や、あれかい、はッはッはッ、わるい病氣は酷いね、何も病
氣や蟲の故で仕たんぢやアないよ、ありやア汝、頭腦にも身
體にも閑暇があり過ぎて困つて居た時だからね、ちよいと退

窟まぎれよ、ふざけて見たのさ、しかし罪ぢやアないせ、つ
まり今日の間違つた奴等へ頂門の一針だ、下手な修身講釋を
する道學先生の三年や五年よりも、たしかに效能のある管だ、
は、色と慾の深い奴等が寒中、ぞろ／＼用もない柏木の
淀橋くんだりへ我劣らじと押掛けて、草の生えた空地で、あ
つと呆れた工合、面白かつたなア、わけて痛快なは鬼幸だッ
たよ、思ひもよらぬ死亡廣告を出されて青くなつてる奴を、
また年内餘日もない大晦日前に屋敷へ引き寄せて、さんざ嘲
弄した結句の果に背負投げを食はしてやつた時の面ア、なか
つたせ、まだ眼に見るやうだ、ことしの花見に乞食を自働車
へ乗せてやつたも、面白かつたね、はッはッはッはッ
「それが良人、いけませんよ、あゝいふ事を、さう面白をかし

く思つて居らッしやる間は、また面白だけで済む事ばかり
は、御坐いませんからねエ、今までの御身分と違つて、少し
は眞面目に萬事、御用心あそばさない」と
「わかつた、わかつてるよ、これからは一切あゝいふ悪戯を止
さう、實際これからア頭腦にも身體にも暇がないから退窟中
ぎれに、ふざけても居れないよ、大に眞面目だ、しかし近來
は、ちよい／＼、よく汝に叱られるね」
「ほ、／＼、良人が皆、お悪いからで御坐いますよ」
「なアに乃公の善い悪いよりも汝の馬力が強くなつて來たんだ」
「あら、馬力、ほ、／＼、まア酷い事を」
「だつて、さうだよ、今まで乃公の方から通つて來た時分は何
でも汝、あとなしく怖らしく只、はい／＼と言つて萬事、か

うぢやアなかつたせ、つまり女といふものは男の内兜を見透して、いよゝ安心すると氣が丈夫になつて段々強くなるんだな、居直つて太くなる工合、まるで強盜のやうなもんだ、はゝゝゝ」

「竊盜でも強盜でも、何とでも、すきな事を仰しやつて、キタは平氣で居りますが、例の悪戯は良人、他人ばかりの世間で御坐いますよ」

「ラン、よし」

「全くで御坐いますよ」

「あゝ承知してる」

用が済めば、かまはずに早く寢よといふ言葉を、無上の有難味に感じて、階下の飯炊婆も小間使も枕に就けど、まだ階上には雨戸一二枚を閉め残して、寒からぬ肌心地、臥房へも入らず身を横へながら外を眺むれば、黒繪の如き上野の森に、ぼつと霞める春の臘月、

「絶えず見馴れて居ても、かうしたところは、わるくないねエ四邊は閑静だし、外に人はなし、まるで浮世を離れた山家のやうだ、殆ど市中の景色とは思はれないせ、加之も時候が宜いね、花は散つて春の末、夏まだ來ない肌心地に、この臘月夜だ」

「しくものはなしといふので、御坐いますねエ」

「さうさ、水で洗った空に磨いたやうな秋の月よりも、あの、ぼろろとしたところに得もいられない風情があるよ、何だか妙に人の氣を暖るやうでね、衣香扇影の春も夢と過ぎ去りし多情多恨の才子佳人が、まゝならぬ戀を語って情緒纏綿に泣くのは、かういふ時だせ、しかし乃公と汝は笑って樂しむやうになつたなア、はゝゝゝ」

折しも池の端の待合を流し歩いて、この初音町まで來かかりし新内の連れ弾き、春の夜深に三味の音ますゝ、研えて、おもはず耳を澄ませし廣行、今更に畫ける如きキタ女の顔を打守りながら、我しらず聲を沈めて、

「あゝ、雨戸を閉めて仕舞へ、あゝいふものを聞いて、をかしく變な氣から互の身を過つやうな人間にならなかつたのが、

實に僥倖だつたよ」

其二

子爵中の第一、華族中の富豪、その長男に生れて帝大出身の法學士、年は正に三十一、いはゆる鬼に鐵棒の身を我から去つて廢婦を甘んじ、さらに赤裸々たる一個の平民として初音町の借屋住居、これを面白しと見るも見ざるも、以上の事實は既に世間普通の尺度と秤量を以て極めらるゝ男でなし、

さらには絶世の美人、その影にありといへる一事は、一面に於て松川廣行の人格を疑ひ耽溺を惜しむものあれど、また一面に於ては松川廣行の洒落を稱し艶福を羨むものあり、
わけて人間の萬事一切を戀のためとして、愛は生命の露なりといふ先生達より見れば、富貴を捨て、戀愛の二字に生きたる松川廣行、殆ど詩的の感涙を以て迎へられぬ、

いかに夜は遅くとも、朝は必ず六時前、全身の冷水磨擦に朱を注ぐが如くなりし後、露まだ乾ぬ上野の森に對うて二階の障子を開け放ち、さも心地よげにエムシの煙を白く吐きながら、都下十

三種の新聞中いづれか四五枚に眼を通せし頃、^〇タ女が運ぶは四合の沸騰牛乳に半熟の鶏卵三個とバター焼のパン一斤、
今朝ア久しぶりで味噌汁を吸ッて見よう、ついでに飯も付けて来てくれ」

「では、さう致しませう」
「おい、それを下げるンぢやアないよ、やはり汝、それは、それで、別に味噌汁と飯だ」
「あら、まア良人、この外に召し上りますの、ほ、これだけでも世間普通の、たしかに二三人前は御坐いますよ」
「他の何人前でも宜い、乃公の胃袋には一人前だ、大い汽鐘は普通よりも石炭の入るもんだよ」
「あまり石炭が多過ぎて、汽鐘の損じるやうな事は、御坐います」

すまいか」
「大丈夫、安心しろ、保険付の別製だ」
階下より取次の小婢、一葉の名刺を持ち来りて、是非お目にかゝりたいとの口上、キタ女これを廣行に渡せば、おもはず眉を擧めながら、

「草野蟲聲、は、ア蟲聲、こりやア文學雑誌や新聞で、をりをり見る小説家だ、小説家が乃公に逢ひたい、はてね」
「御存じで、御坐いませんの」

「知らない、第一この乃公は、あまり小説なんか讀まないからね、しかし文士といふもの全體、どんなもんか幸ひ一度、かういふ用のない閑暇な時に逢つて置かう、また何かの参考に
なるだらう、汝こゝに居ない方が宜いね、年中モデルばかり

探してゐる小説家や美術家は汝に取つて頗る危険物だよ、は、は、は、」

ちらと睨みし額越の目元、水晶の如し、

「また御冗談を、は、は、は、」

笑ひながら靜に振返りて、

「そさうのないやう御丁寧に、お通し申して、お番茶を差上げ

なれう」

其まゝ鄰室の六疊へ襖越の雲隠れ、
小婢の案内に入り来りし草野蟲聲、ひよろ／＼と高く瘦せこけて前に倒るゝが如く背髓の曲りし體格、日陽の活動よりも日陰の沈思黙考に耽れるためか、蒼白き顔色いよ／＼血の氣を失ひ、元來の神經過敏に營養と運動の不足をす／＼病人めいて、年輩三十前

後、電車でも往來でも手に放さぬ泰西の詩集一部を携へながら、先生これなくては方角も分らぬ鼻頭の眼鏡越、わざく、醫者の診察に及ばず、一見その容貌に人生の悲惨を宿して、何とやら哀れを催せし廣行、

「さア此方へ、松川廣行です」

酒れても大川の末に水は絶えず、借屋住居なれど下宿屋より一轉せし新世帯でなく、自然に整ひし座敷の調子、淺黄無地の縮緬座蒲團、古き桐胴に光琳蒔繪の火鉢、マニラの葉巻とエチプトの金口を供せられて、聊か場馴れぬ點あれど、わざと殊更に落付いたる顔色、

「始めて、お目にかゝります、草野蟲聲で」

「や、お名前は久しく聞いて居ります、此方は承知して居って

も、先生方に知られる筈のない松川ですが、第一よく此家がわかりましたね、全體、どういふ御用です」
「別に改まつて、どういふ用と、いふ用も御坐いませんが、或新聞記者から貴君の事を承りました一應は是非、お目にかゝつて置きたいと、つまり我々が説の上に於て筆の上に於て、絶えず常に理想とするところを現在、貴君に依つて遺憾なく實行されたのですから」

「は、ア、或新聞記者から、加之も先生方の理想を、この松川が、實行したといふ事に、なるンですか」

「さうです、殆ど社會の全部を擧げて、只これ物質的の今日、わけて最も羨望の的となるべき富貴を捨て、更に意義あり生命ある戀のため愛のため、その神聖を何物にも汚されず完

全に現實されたといふ一事は、いかに我々の理想を世間に強
められたか、いかに我々の權威を世間に發揮されたか、我々
としては出來得るかぎりの満足を表して、感謝せざるを得な
せん」

案外の人間に案外の満足を表せられ、おもはぬ不意に思はぬ感謝
を捧げられて、だしぬけの有難迷惑、流石の廣行も殆ど返答に困
りし體、たゞ笑うて挨拶するより外なし、

「は、さういふ事で來られたかと思つたに、は、さういふ
いふこつてすか、つまり僕の調子外れに生家を飛び出して今
日かうなつた馬鹿さ加減が先生方の、お氣に入つた理由です
な、は、さういふは、過失の功名ですな、は、は、は、は、は、は、

入らざる無用の見當違ひに例の大口を開いて笑へど、その笑ひ聲

を寧ろ謙遜的と見る二度目の見當違ひに、ます、膝を乗り出せ
し蟲聲、

「いや、全くです、社會あらゆる總ての方面に人間あらゆる偽
善と虚榮とを以て裝飾せる今日、本能の自然に従うて眞美の
結晶たる戀と愛とに生きられたのですから、貴君としては人
生これ以上の幸福なく、また我々より見れば常に高く清く大
なるところから暗示されつゝある理想を現在に實現されたも
のです」

「は、さういふ清く高い先生方の理想攻めに尊敬されては困り
ますよ、なアに實はね、本能の自然でも眞美の結晶でもあり
ません、たゞ祖先傳來の系圖一卷に縛られて家風とか格式と
かいふ兒戲に類した面倒臭い華族が嫌で、鳥の籠を放れた如

く飛び出して来た此處に、さうですね、まづ妻とすれば、しても差支のない女が一人、あつたからで、その他に何かあるもんですか、は、人間の本能も幸福も努力奮闘して得らるれば實際これからですよ、今のところは只この通り、ぼんやりと生きてるのみで、わざ／＼戀にも愛にも生きては居ませんよ、當分は絲に繋がれた風船玉の如く、むやみな方角へ飛ばないだけの事で、いはゆる今日の言葉でいへば、何等の充實もない空虚な無意味の生活状態です、やかましい伯父でもあれば吐鳴り付けられる境涯でせうよ、は、

快活恬淡の廣行、もはや蒼蠅くになりて殆ど半笑ひに扱へど、先生さらに依然として少しの感じもない顔色、

「いはゆる俗世間の充實したといふ生活状態は、寧ろ我々の眼

より却つて空虚な無意味で、あはれむべき點に満ちて居ります、ついでには甚だ突然で御坐います、なほ委しく承つて、ありのまゝに少しも偽らない神聖の戀愛、それ直に貴君を小説の主人公として、いかゞでせう、幸ひ目下、他に筆も執つて居りませんから、願はくば奥さんにも一度、この際お眼にかゝつて置けば猶更ら萬事に都合が宜いかと思ひます、つまり架空の想像でなく、現在こゝに貴君といふ實際の主人公があつて、これほど立派に遺憾なく戀愛の神聖を遂げられた事實を此まゝ埋めて置くといふは、いかに我々として忍びない事ですから」

さらに憎むべき點もなく罪もなければ、世間しらすの無遠慮と自個本位の無作法とに、廣行いよ／＼堪らず眉を寄せ鼻を皺めて、

今は真正面より顔を見るさへ不愉快の體、横を向いて一息に濃厚なる眞の煙を吐きながら、

「折角ですが眞ツ平、御免を蒙らう、まだ満足に一家の主人公にもなれない松川廣行が、いやしくも今日、文壇の大家たる先生の筆を煩はして小説の主人公には逆も、なれませんよ、もし前途將來、幾年の後に於て多少、みづから心に誇るべき自信の時でも来れば、その節あらためて願ひたい、また愚妻は頗る時代の潮流に後れた舊思想な奴で、自分の知つたところへも出かけない糞蟲流だから、わざ／＼用もない始めての人に逢ひませんよ、まして刹那の瞥見にも何等かの意味を以て深く印象を残さるゝ先生のやうな人には、一種の恐怖心に襲はれて顔色を變へるほどの臆病もンですからね」

「なるほど、いや當世風に華かな交際場裡の喋々たる婦人よも寧ろ却つて實際は、さういふ温雅なる御婦人に底力の強い戀愛の眞味を保たれて居るんですな、お目にかゝれないだけです／＼我々の尊敬に値ひします」

「時に先生、實は今日、ちよいと約束の時間があつて他出しますから其うち、また、あいで下さい、これで今日は失敬しませう」

「は、では近日また伺ひますが、その節、小説の事は暫く置いて、一篇の詩を御覧に入れませう、つまり貴君を詩にしたもので、愛の神の暖き袖に包まれたといふ意味を」

松川廣行、今日は暗剣殺に向へり、小説を御免蒙れば詩にすると迫られ、もし詩を断れば何にするといふやら知れぬ相手、どこま

でも免れぬ災難と諦めて、

「有難う、どうか願ひませう」

其まゝ坐を起つて二階の降り口より下を向いての大聲、

「あら、お歸りだよ」

やう／＼これで退散せり、

草野蟲聲の去るや否、そつと隔ての襖を開けてキタ女の顔、例の太く濃き眉を八字に寄せし雪の額際、いよ／＼牙えて曉の白き花を見るが如し、

「まア良人、トンでもない、お客様でした事ね」

廣行、ごろりと身を横に兩脚を伸ばしながら、振返りて右手の頬杖、

「や、實に困つたよ、本月^五日^五部^四所謂るひとごろしと稱せら

五部四

る、都下第一の要練な高利貸、あの鬼幸でさへ手鞠に取つて面白かつた乃公も、今日といふ今日は實に閉口したね、殆ど一種の責苦だつたせ、まさか小説家全體が、あゝでもなからうが、文士なんかといふもの、その筆に現はれたところとは違つて、あまり社會の實際に没交渉すぎるね、あまり眼前が見えなさ過ぎるよ、責任ある多數の決議でさへ間違つた事多い世の中に、何事も獨り誇稱の自分から割り出して他に對する相互關係といふ事を少しも知らないから、あゝなるんだせ、寧ろ哀れに氣の毒な感じが起つた、第一あの不健全に發育を妨げられて不調和に出来上つた容貌體格、どうだい、あれで最も健全の腦力を要すべき思想界の優勝者ならんとするんだもの、勢ひ半病人にならざるを得ないよ、經節と一般、

まるで自分の身體を削って行くんだからね、同じ経節も場違ひだ、ありやア本節でない、かめ節だせ」

「まア良人、酷い事を、あかはいさうに、あの方だつて何も御自分の身體が悪くなるのを、わざと、すき好んでは入らッしやいませんよ」

「入らッしやらなくつても現在の事實が、さうなるだらう、人生の行路上、よくない考へだ、道のために倒るゝといふのは、少し大きい立派な道のこつたよ、初めて逢つた乃公を捉へて、すぐに小説を書かうの詩にするのといふやうな、狼狽へた慌てた小さい薄ッぺらな道のために大切な生命を懸けちやア、つまるまい、はゝゝゝしかし罪はないね、あれで自分の事ぢやアない、他の事にも戀だの愛だのと眼色を變へて騒ぐ

んだからね、あゝ、是非、汝を見たいと言つたせ、見せてやれば宜かつたよ」

「今になつて良人、そんな事を、小説家や美術家は年中モデルばかり探し歩いてるから面倒だ、隠れろと仰しやつてさ、お鄰席で聞いて居れば、キタの事を良人、何と、お言ひで御坐いました、華族が嫌で飛び出して来た此家に、まづ妻とすれば、さうですわねエ、しても差支のない女が一人、あつたからだと、もし差支のない女が二人も三人もあれば良人、どうなさいます、どんな女を、一時の間に合はせに、お取りで御坐います」

「はゝゝゝさういふ工合に聞えたかい」
「さういふ工合に聞えたのでは御坐いません、現在、さう儘に

仰しやツたんです

「そりやア悪かった、つい口が之ッてね、は、は、は、」
「あ心にならない事が、口へ出る等は御坐いません、なるほどキ
タは仕方なしに已むを得ず、冤も角まア當分、かうして置い
て戴く身分で御坐いますから、別に恨みがましい御不足を申
し上げませんが、わざ／＼始めて来た方にまで」
「や、とんだ事で窘められる、あの平凡小説家め、さんざ眼前
で乃公を惱ました上、歸った後にまで災難を残しやアがる、
ちよいと来てさへ、これだ、あゝいふ奴の書いた小説は、定
めて世間一般を惱ますこつたらう、いふ事に罪がないと思ッ
たが、やはり罪の深い奴だな、今度もし来たら、今日のやう
に哀れ氣を催さず、容赦なしに、頭上から吐鳴り付けてやら

ら

「ほ、ほ、そんな良人、勝手な事が御坐いますか、御目方
い事を、棚へ上げて」
「棚の上でも床の下でも宜いぢやアないか、悪いといはれて謝
るのは世間の他人に向つた時だ、それとも汝、この乃公に謝
らしたいのか」
「ほ、ほ、御免あそばせ、キタは良人、さういふ覺悟で申した
のでは御坐いませんから」
「ぢやア、どういふ覺悟で、言つた」
「ですから、御免あそばせと、申し上げてるでは御坐いません
か」
「は、は、弱いなエ、これが汝、主客顛倒の論鋒といふんだせ、

は、い、い、時に今日の晝飯は何だ、何を食はしてくれる」

「まだ良人、朝、めし上ったばかりで御坐いますよ、その時が
来ませんと、わかりかねます」

勝ちたくはなけれど、負けて口惜しく、口惜しけれど腹も立たず、
腹は立たねど笑ひたかないキタ女の風情、すつと其まゝ静に二階
を降り行く後姿は、殆ど技藝の神に入ると稱せらるゝ名優の遺憾
なき表情よりも、わざとならぬ自然美の極に達して、惱殺の文字
以外さらに形容詞なし、

されど馴れし廣行の眼には、この名花一輪これを常として見送り
もせず、残れる今日の新聞を手に取上げながら、この木像が今あ
の馬鹿口をさゝしかと、ふしぎに思はるゝ沈思默讀、
花柳の巷に溺れて我ものならぬ美人の一颯一笑に、惜氣ト家

庫を失ひ身を亡ぼし罪を犯すものより見れば、この松川廣行、い
かにも冥加の盡きた勿體ない奴なり、

其三

きのふは思ひもよらぬ小説家に襲ひ込まれて、ちよいと憎からぬ
夫婦喧嘩の真似事をせしが、現在こゝに暫く世を忍ぶが如き此ご
ろの境涯、

あらたまりて誰訪ひ来る人もない身、午前中に都下あらゆる新聞

雑誌、午後は内外新刊の書籍に耽りて、飽けば其まゝ飄然と例のステッキを引き摺りながら、近き谷中の邊より上野の散歩、をり、田端王子を以て遠出とせる廣行、また今日も何處へ出でしや、春の末、夏の初、日影うらゝかに卯月の空は霞みて、樹々の若葉まじりに散り残る花の色、白く赤く、ちらほらと人を誘ふ門外の好時節、良人の出でし後は、なほさら隅々まで心の行き渡りて、歸り來ませる時に塵一筋も見せじと、けさ掃きし八畳を今また掃き出だして、箒を隻手に何心なく二階の縁端より見れば、袴の裾長く黒の山高帽を深く一重外套に身を包みて静に歩み來る老體、正しく父の松川廣道、

良人の父とはいへど、その良人こゝに家を去れば、世間普通の言葉に晴れて舅ともいはれぬ身、いと猶更ら嬉しく有難く、用なき平生は睡れる如くに静なる性質なれど、慌てゝ手に持てる箒を鄰席の六疊へ投げ込ひや否、召使ひに出迎はせては濟まぬ心の我を忘れて駆け降りし途端、梯子段の二つ目よりこぼり落ちて、玉を欺く眞白の踵に赤く梨地のやうなる過擦傷をうけながら、痛いとも得いはず顔も皺めず、其まゝ入口の障子を引き開け、つゝまやかに坐して待ち受けし哀れさ、こつゝ今ごろ何處をステッキの先に叩いて歩くやら、良人たる廣行に一目、見せてやりたし、父の廣道、門の敷石に歩を停めて、まだ依然たる山村キタといふ表札を仰ぎ見ながら、ずつと入れば、懇懇に迎へし我子の妻、

「お、汝、どツかで乃公の來るのが見えたかね」

「は」

「廣行は居るかな」

「兎も角も、お二階へ」

跪いて帽子を受け取り、そつと背後より外套を脱がせ、あとに隨いて二階へ上り、床の前に座蒲團を進め、引退りて身を縮めながら、

「御機嫌、よろしう御坐います、折角、お越し遊ばしましたに、

また今日も、生憎」

「は、ア、また居らんか、よく出る奴だな、これで二度も來て逢はな」

「どうか暫時、つい其邊までと心得ます」

名師

「いや、廣行に逢はンでも、汝が居れば宜い」

「恐れ入ります」

「やはり電話がないと困るな、屋敷の者が何と言ッても、をり」

「乃公は來たいからね」

はやキタ女の眼に涙、

「定めし、あゝいふ我まゝな奴だから、いろ／＼世話が多からうな、まア辛抱してヤツてくれ、あれは幼少い時から萬事に無遠慮な、氣の勝つたもんだからね」

たゞ無言のまゝ、兩手をついて頭を下げしキタ女、艶々しき黒髪の打頭へるは、保ちかねし涙、眼睫に宿らず膝に落ちて、泣けり、

泣けり、

泣いて聲は聊か曇れど、靜に晴れし目元の額越、

「お茶は、いづれに致しまして」
ますく、いぢらしく哀れに見る父の廣道、

「さうだな、過日、来た時、なか／＼腹加減であつたが、今日
は煎茶を欲しい」

「はい、しかし只今お茶が、あまり、よろしく御坐いませんで」
「いや、入れてくれ、ば宜い、たゞ咽喉が乾いてね」

抹茶は固より煎茶の心得、茶道一切はキタ女が得たる藝中の至藝、
あもはず廣道をして舌鼓を打たしむ、

「すべて茶の方は、よほど手に這入ッて居るね」
「お恥かしう御坐います」

「時に相變らず廣行は浴室で、獨相撲を取ッてるかね、は、は、
は、」



キタ女も始めて笑ひぬ、

「ほ、／＼、當分の間は、御本でも讀む外に、これといふ御用が
御坐いませんから」

「しかし廣行の性質として此ま、長く、本ばかり讀んで居りも
すまい、何か汝に、さういふ意味で話した事はないかね」

「はい、あらためて別に、お話しも承りませんが、いづれ何
か、さういふ思召のある事と、キタは心得て居ります、十三

種も毎日まゐります新開で御覽になつた後、をり／＼切り
抜いたところが御坐いますから、伺ッて見ますと、たゞ笑ッ

たま、で、しかし、お手文庫に、その切りぬきが澤山」
「そこだ、萬事あゝいふ無頓著で、ばツとして居ても、さうい
ふ點のあるのが廣行だよ、は、／＼、世間で何といふか知らな

いが乃公はね、廣行の出たのを却って、おもしろく見て居る、何をするか實は心に、楽しんで見て居るよ、第一また汝といふ優しいものが、付いて居てくれるでな、安心して居る、どうかね、よろしく廣行を頼むせ」

「は、はい、迎も、不束なキタ、迎も及びませんが」「いや、汝に頼んで置けば安心する、ところで今日は何か汝にみやげを持ッて来ようと思ッたがね、萬事、人まかせの體でね、思ふやうにならない」

懷中より取出だせし袱紗包、ざくりと置いて、
「これはね、いろ／＼の小道具を外して乃公が持ッて居た中から、選つて来たよ、は、は、は、」
キタ女、坐を迂り寄りて、押戴けば、案外の重さ、されど今この

場ばに開ひけて見みられもせず、

「何か、存ぞんじませんが、ありがたく頂戴ちやうたいいたします」
「其うち、また来ようね、あまり長く居れない、何、一人で歸る、それに及ばん、却ッて一人が宜い、電車の地圖で、よく見て置いたからね、今日も汝、間違はずに乗替を貰ッて、駒込の白山前で降りて、この邊まで辻俵つじはらに乗ッて来たよ、は、は、便利だね」

帽子ぼうし、外套がいのう、下女げにようにも手を付けさせず、履物はきものを揃へて門口へ送り出し、その姿の辻を曲りて消えし後、また辻まで走せ行きて見送れば、見返りて手を觸られ、はッと傍の軒下に身を潜めながらの中腰なかこし

わう／＼客待の俵たわらに乗られしを見届けて後、家に歸りて袱紗包を



解けば、綿の如くなりし大奉書四五枚の中より、眼を射るばかり
 の金色燦爛、
 刀の目貫、柄頭、切齒、銅の數々いづれも名作、このまゝ鑄潰し
 ても四百目以上の黄金、印籠の緒締を外されしか、みごとに大粒
 の珊瑚珠十一個、
 キタ女、見るや否、兩眼の涙、ぼろ／＼と眞白き頬を傳うて、其
 まゝ泣き伏しぬ、
 何をがな此身に賜はらむとて、眼に立たぬやう人に知れぬやう、
 この品々いかに御心を苦しめられしか、我物を盗むが如くに内々
 そつと嘸や嘸、いかに四邊を憚りて御苦勞あそばせしやら、もし
 差迫りし事でもあれば、これを賣拂へとの思召か、たとひ其日に
 飢うるとも、キタが手足の動く間、これが何として世間の通用に

代へらるべき、もし帶留か簪その他にせよとの思召か、たとひ身
 の冥加にせよ、キタが心の狂はぬ間、これが何として入らざる浮
 世の飾りに用ゐらるべき、

春夏の交、永き日も傾いて、夕暮近くに、ぶらりと歸り來りし廣
 行、
 「や、今日は實に草臥れたよ、山つゞきに田端から王子まで出
 かけてね、砂塵で眞ッ白だ」
 ばた／＼と梯子段の下にて袖を叩き裾を拂へば、キタ女あもはず
 身を反して顔を横に、

「あらまア良人」

その聲を後に聞き流して、はや二階へ上るや否、我身を抛げ出す
が如き大の字、これも華族では出来ぬ氣樂さ、

「良人、何故お早く歸つて下さいませんの、また今日お父様が、
入らッしやいましたよ」

起き直りし廣行、

「しまつた、また入らしたか、残念だつたよ、これで二度お
目にかゝれなかつたな」

「勿體なう御坐いますよ、こゝへ來ようと思召せばこそ、誰に
御遠慮のない中を良人、いろ／＼お氣兼ねばして、馴れな
い電車や辻傳で入らッしやるんですもの、御存じなくても、
やはり御不孝に當りますよ」

「どうも乃公より汝の方が、お氣に入つたばかりでなく、縁が
深いやうだね」

「それに良人、有難い事に此キタを何と思召してか、こんな、
おみやげを」

袱紗包を解いて眼前に開かれし廣行、我は家を捨て、も父は我を
捨て給はぬ心の品々、差俯いてまた今更の嬉し涙に泣く妻よりも、
身に徹へて辛し、

「さうか、これを汝に下すつたか、代價にして幾何になるか兎
も角、こりやアね、家に傳はつた名作物ばかりだよ」

「かやうなものを戴いて、もし、お父様の御迷惑になるやうな
事は御坐いますまいか」

「なアに、さういふ心配は入らない、父の手許で、まだ外に澤

山ある中だから、しかし思召は厚いせ、よほど汝が可愛いと見える」

六〇

「いゝえ、これも皆、良人のためで御坐いますよ、なるほど廣行が家を出たのは、かういふ立派な理由であつたかと一日も早く良人、おなり遊ばさないと、すみませんねエ」

「全くだ、うか／＼して居れない」

「世間普通の親御とは違つて、一切お暮らし向の事に良人の御心配ない、お父様ですもの、他より猶更ら御孝行も、お樂に出来る筈で御坐いませう」

「いち／＼さういはれると困るが、こゝ暫時だ、まア黙つて見てをれ、田端から王子まで歩いて草臥れるが天下横行の道に四垂れる乃公でない、まさか慈愛の深い父に不肖の子を持つ」

た敷は發せしめないよ、華族を脱し子爵を捨てるには、それだけの必要と覺悟とあつてのこつた、あの西田から取つて来た三千圓、あれに手を付け出す時は、そろ／＼乃公の社會へ出る時だ、しかし三千圓の事に付いて今日、父は何もいはれなかつたらうな、さらに御存じのない様子だつたらうな、いくら西田でも固く念を押して来たから、僅あれくらゐの金で父の耳には入れまい、なアに餘計な御心配かけては、猶更ら申譯ないからよ」

其四

きのふ半日の野外に草臥れしか、いかに夜は遅くとも朝は必ず六時前の廣行、今朝にかぎりて九時を過せど臥房を出でず、はや十時に近きころ、なほ其まゝ、夜著の襟に顔を埋めて、もしやと思つて靜に膝行り寄りしキタ女、夜著の上に軽く片手を置きながら、

「良人、良人、どう遊ばしたの、もう十時で御坐いますよ、ね
エ良人」

夢にも入らざりしか、夜著の中より寢言でもない聲、
「ひゝさうか、ひゝ」

「どツか御氣分でも、お悪いのでは御坐いませんか」
夜著の襟を持ち上げて、これ見よとばかりに、ぬツと顔を差出し額越、

「なアに今朝ア平常よりも早く、天明前に眼は覺めたがね、ちよいと考へる事があつて、やう／＼今その考へが付いたところだ、途中で起きちやア折角の考へに龜裂が入るからさ」

「はゝゝ、夢と引繼ぎで寝ながら今まで考へて居らしつたの」
「夢と引繼ぎ、こりやア汝に似合はない洒落だ、はゝゝ、どりや起きよう、もう十時かい」

枕頭に聲を潜めしキタ女、

「階下に、お客様が」

「客、誰だ、謝れば宜らに」

「それがね良人、断りきれない人で御坐いますよ、あの新聞屋さん、例の淀橋一件から、ちよいと来かけた新聞屋さんですからね、一應は断つて見ましたが、是非お待ちすると言つて、階下の六疊に先刻から」

「うるさいね、しかし始めての奴でなし、待たした以上、仕方がない、一時日は小説家で今日は新聞記者か、は、は、だが穴居的小説家と違つて多少、世の中の空気に觸れてるから話しの分る點もあるよ」

襦衣のまゝ例の冷水摩擦に降り行きし後、手早く夜具を疊み座敷を掃き出して、待たせし新聞記者を迎へ、慰勉に茶菓を進めながら、

「大變に、お待たせ申し上げまして」

これまで二三度も見ながら、今日また見直せば、今日また新にやえて、ますます水際の立ちし美人、見るほど眼に馴るゝ容色とは違ひ、見る毎に何とやら我身を照り返さるゝ心地、場うてのせざるを以て第一の條件とする新聞記者も、聊か固くなりし體、

「朝から、お邪魔いたしましたして、何とも恐れ入ります」

「いえ平生は、かやうに遅くも御坐いませんが、つい今朝に限つて、失禮をいたします、どうか貴君、お樂に、お膝を、おくづし遊ばして」

「は、ありがたう、いや、これで結構です、しかし此邊は閑静で宜しう御坐いますな、塵埃だらけの中を飛び廻つてる眼から見ますと、實に、まるで、別世界の氣が致しますよ」

「嗚、お忙しう入らっしゃいますえう」

「時に昨年の暮は、とんだ御迷惑で御坐いましたな、あれ以来まだ残念ながら例の、いたづらもの、わかりませぬよ、随分手を盡して見ましたが、よほど巧に晦まして居りますね、第二あの後に業を仕ないからでも御坐いますか」

六六

「あの節は、いろ／＼御深切さまに」
「いや、あれが御縁になつて、御主人に手前こそ、御厄介になつた事が御坐います、舊臘、途中で、お歳暮を戴きまして」
「まア失禮な、途中で、いえ萬事あゝいふ露骨の人で御坐いますから、この後とも一切お氣に、お觸へ下さいませぬやう、よろしく、お願ひ申し上げます、ほ／＼、少しも存じませぬで」
「どうして、あれだけの名門で、よくまア、あれだけ磊落落淡

な、平民的になられますよ」
「ほ／＼自分でも常に、さう申して居ります、乃公は百姓か士方に生れる筈を、あんな家へ間違つて出たんだと、ほ／＼、總てが其調子で御坐いますから、ついで人様にも失禮ばかり」
折しも全身の冷水摩擦を終りて、顔も手も赤く酔へるが、こゝろ入り来りし廣行、座に著いて輕き會釋、

「やア暫く、逢ひませぬな」
「その後は、御無沙汰を致しました、實は社用で、
旅行中で御坐いましたから」
「さうですか、京阪の春は格別、また宜いでせうな、あいキタ、今朝ア晝飯と同時にするよ、馬鹿に寝坊をした、時に汝、この先生と何か頻に談話をして居たらしいが、氣を付けないと、

六七

いかなぞ、すぐに新聞種だ、或意味に於ける一種の斥候で、かういふ先生には觸らぬ神に祟なしたよ、はゝゝゝ」

「こりやア酷い、新聞記者と厄病神と同じ取扱ひは少々、酷う御坐いますな、はゝゝゝ」

キタ女も笑ひながら坐を避けし後、廣行、胡坐のまゝの席を進めて満面の微笑、

「どうですな、近ごろ面白い事がありますか、この松川も君、首尾よく放免されて、いよゝ殿様を遁げて出たから實に暢氣だ、心静に體豊に骨まいた伸びたりといふのは、これだらう、たしかに五年や十年は長生するに相違ないね、はゝゝゝ」

「しかし世間の俗物から見れば、不思議に思ッて居りますよ、富貴これ權勢の今日」

流石は人に馴れたる新聞記者、俄に四邊を見廻し首を縮め聲を潜めて、

「その不思議には幾分か、奥さんの美も含んで居りませう、もし他人なら幾分でなく、全部あの美が正體ですな、へゝゝゝ廣行、反身の高笑ひ、

「はッはッはッ、もし現在の事實が雄辯とすれば、まづ今のところ、奈何せん、さういはれても仕方がない、しかし不思議の正體は、別にありだ、今に物凄く現はして見せるからね、はゝゝゝ時に君、草野蟲聲といふ小説家、ありやア君が話したんぢやアないかね、ある新聞記者に聞いたと、言ッて來たせ」

「はゝゝア蟲聲、伺ひましたか」

「伺はれたよ、大に伺はれて大に惱まされた、いくら暇でも、あゝいふもんを君、よこしてくれては困るね、もし人間らしい奴を紹介するが宜い、ありやア、人間放れを仕すぎてるよ」

「いや、實は、貴君へ、あれを紹介いたしたのでは御坐いませ、ちよいと只、お噂をしたばかりで」

「お噂でも何でも、うるさいよ、蒼白い瘦ッこけた半病人の面で、熱に浮かされた嘆言のやうな戀だの愛だのと、まるで色飯鬼の亡者だ、ありやア讀んで字の如く蟲聲、蟲の聲でなく、蟲の息だせ、しかし本人は氣の毒なもんだね、あゝいふものを今日社會の一部に歡迎するから、わいて出るんだよ、樹まづ腐りて蟲これに生ずだらう」

「あの蟲聲、をり／＼人の談話を横合から聞き噓ッて、それが自分の何かに觸れると、すぐ向う見ずに出掛けるといふ、わるい病ひが御坐いましてね」

「何かに觸れるンぢやアない、大體に氣が觸れてるんだらう、はゝゝ、蟲聲は蟲聲として君、今日、どういふ用で」

「御無沙汰の、あわび旁、實は今日、我社の使者として伺ひました」

「一個人の君でなく、新聞社の使者として、はてね、全體どういふ事で」

「つまり簡単に要領だけを、實は貴君を我社の記者として、お迎へ申したいので」

「ふゝ、この松川を、新聞記者に」

「さやうです、子爵家の御相續人では却つて雙方に困りますが、今日の貴君として職業中の最も高等なる職業、社會の木鐸たる新聞記者は、決して御名譽を損すべきものでないと信じて居ります、無論また我社としては出來得るかぎり、御優待する覺悟で、もし御承諾を戴けば、あらためて社長が直接、伺ひますが、いかゞで御坐いませう」

松川廣行、おもはず腕を組んで、暫し兩眼を閉ぢしが、閉ぢし兩眼を開くと共に、護謨人形の如く首肯いて、

「あもしろい、新聞記者は面白い、愉快だ」

「是非、御承諾を」

「いや、面白いには面白いがね、即答は出來ないよ、考へた後でなければ」

「いづれ萬事の御都合も御坐いませうから只今、すぐ御即答を願はずとも、考への上で」
「ところで君、その考へ中が少々、長いよ」
「あ長くとも、四五日の内には」
「は、は、は、そりやア君、世間普通の考へ中だ、この松川は尠くも二三年、考へるせ」

「え、二三年」

「わるくすると四五年だ、まづ此方で考へるよりも、そつちで考へべき事ぢやアないかね、いまだ會つて記者たるに何等の經驗もない初心、素人の松川廣行を、都下有数の新聞社として出來得るかぎりの優待に招くといふ必要は全體、どこにあるそれが分らない、もし他より今日この松川廣行を見れば君、

たゞ華族から平民になつた事と、たゞ帝大出身の法學士といふ、つまらない肩書のあるだけだらう、これで新聞社が出来得るかぎりの優待するといへば、その新聞社なるもの、權威を疑はなければならぬ、天下萬人の最も羨むべき華族を去つて富貴を捨つるに弊履を棄つるが如き法學士松川廣行氏を我社に聘せりといふ、この廣告だけでは君、あまり小兒だましで、あまり無意味ぢやアないかね、はゝゝゝいかに新聞記者は面白い、男子、世に立って劍を握らざれば筆を執るべしで、宿志もし遂げずんば、この松川も寧ろ新聞記者になつて見ようと思つてるが、その新聞記者たるまでに相當の道行があるからね、尠くも二三年、或は四五年、どうしても歲月の必要があるぢやアないか、考へ中とは君、この首を傾けて

座蒲團の上に坐りながら考へる意味でないよ、第一また生活のために新聞記者たるは嫌だ、食ふために筆を執るくらゐなら鋤鋤を取つて麥飲で生命を繋ぐよ、はゝゝゝ大體まづ以上の理由によりて、折角だが、お断りする、あしからず社長に傳へて貰ひたい」

ぎやふんとまゐりし記者先生、今更ら眼を白黒にしながら、

「は、なるほど、貴君として、さうで御坐いませうな」

「まア、かうですな君、幾何お世辭よく鏡舌ツても、これ以外に御愛嬌を呈する事が出来ない」

これで世辭よく愛嬌を呈したといふ、もし世辭愛嬌を取つて退けて鏡舌り出せば、いかに吹き飛ばさるか俄の通げ腰、

「いづれ、また其うちに伺ひますから」

「をり〜君、談話に来てくれ給へ、當分まだ餘まゝに遊んで居ますよ、いはゆる遊食の民でね、はゝゝゝ」
記者先生の去るや否、手を叩いてキタ女を呼び、
「午飯、午飯」

其五

千葉縣、佐倉の兵營勤務、陸軍中尉松川廣國、今年あけて二十七歳、廣行の廢嫡後は當然その子爵を嗣ぐべきもの、

その弟を佐倉に訪うて、宿に待ち受けし兄の廣行、兄弟こゝに相對へば、別れても切れぬ骨肉の情、

「かうなるに付いては、幾度も泣いてくれたが、その時も今もいふ通り、この乃公には、何物も動かすべからざる理由と自信があつての事だから、祖先に對し父に對して、まことに申譯もないが、どうか、この我まゝを見通して貰ひたい、また今日あらためて來たのは外でもない、そろ〜その理由と自信とを事實に現はすべき時機が近いて來たからね、これで當分、汝にも逢はない覺悟だ」

「は、よく、わかりました、廣國も今更ら女々しい、何事も申しません、しかし兄さん、この廣國は軍人であるといふ事を、御承知下さるでせうな、一朝もし國家に急あらば、死すべき

ものであるといふ事を、御承知下されると共に三男の廣正、あれは腹違ひの弟であるといふ事も、多少その間に、合んで居て下さるでせうな」

七八

「承知して居る、そりやア承知だ、萬一さういふ事があれば、この兄は自分一個のために祖先以來、連綿たる松川家の祀りを斷つてまで、あのれの快感を恣にしなさい、しかし汝、腹は違つても廣正は弟だせ、この兄の目的を捨てるのは、その上だよ、もし汝に萬一の事があつても差支ないぢやアないか、さう小さく出では、いかなね」

「いや、別に殊更、小さく出るんではありません、同じ血にしろ、本腹と妾腹、家にとつての輕重、いづれにあるかと、いふのです」

「その輕重論は暫く置かう、まア兎も角、二人の兄弟が家にあるに宜い、性行ともに華族として不似合の乃公は、去つた方が家のためだ、つまり乃公が華族を嫌つて出るよりも、華族そのものが乃公の存在を許さなさいといふ方が適當だらう」

「ぢやア廣國の輕重論と貴兄の適否論を、暫く此まゝに交換して置ませう」

「さうだ、ぐづぐづ議論めいて要領を去つた談話の迂り遠いは、たゞ時間潰しの面倒ばかり多くて雙方、つまるところ何にもならない」

「實は、をりぐ、初音町とかへ、伺ひたいんですが、わざと差控へて居ります」

「いや、來ずに置いてくれ、過日から父が二三度、内々で來ら

七九

入〇
れたがね、有難いは有難いが、寧ろ苦痛だよ、汝にしても、
いよ／＼戦國に出るといふ場合、情に泣かされるより寧ろ泣
かされない方が、よからう、それと同じだ、これから社會に
打ッて出る乃公として、なるほど、あの目的のために家を出
たかといはるゝまで一切、來てはしくない」

「その邊、よく了解しました」

「ぢやア、これで、別れる」

「ステンシヨまで、お送り致しませう」

「なアに、入らない、よけいなこつた」

「では此ま、御免を蒙りますが、兄さん、お寫眞を一枚、送ッ
て下さいませんか」

「寫眞、屋敷に幾枚も残ッてる筈だ」

「貴兄でなく、外に一枚、まだ、お目にかゝりませんからね」

「持つて居てくれるか」

「兎末には、致しません」

「おくる、すぐに撮らして、おくる」

酒々落々として快活なる兄の廣行、軍人氣質の恬淡に育ちし弟の
廣國、互に男らしく手を握ッて相別れしが、寫眞の一語には、兄
弟あもはず一滴の涙
汽車は午後四時に佐倉を發して、廣行の性行、寧ろ三等の面白
も待合の混雑を見て二等に乗り込み、片隅に背を埋めながらステ

ツキを股に夾み腕組みを添へたるまゝ千葉に著きしころ、どやどやと入り來りし五六人の客を何心なく見れば、その中に一人、羞對ひに腰うちかけし老爺は、正しく木戸幸四郎の鬼幸、いづれ千葉にひとごころの歸途、赤切符も誤魔化すべき奴が此室へは、いふまでもなく一等の往復旅費と夕飯の代まで拵ぎ取ればこそ、ことし六十の阪を越せど慾の皮に膏ぎつて皺もない赤面、あけても暮れても他人の身代を餌食に規ふ熊鷹眼を光らし、泣いても喚いても空を嘯くに馴れた禿頭、吸ひ餘りの紙巻莖を耳に挿み、古びたる手提げの小カバンを両手に押へて膝に上せ、ひよいと見る眼の前には松川廣行、

去年の暮に沸湯を呑まされて、ぶる／＼身を顛はせしほどの遺憾はあれど、實は内心その手並に驚きし鬼幸、一まして今は満員の汽

車中、うかくすれば何を吐すか知れぬ相手と、横を向いて無言に窓の外を眺めながら、絶えず尻目に、じろ／＼、

今日の境遇、こればかり氣にせる妻の諫言に、いたづら一切は禁物の折柄、もし去年は失敬といへば、いかに残念でも、どう致しましと、いふべき場合の鬼幸なれど、膝と膝と一尺も離れぬ眞正面に此老爺を見れば、自然に手の出る小兒の玩具に等しく、堪へきれぬ例の廣行、むらく／＼と湧く面白さに、あたり構はず、だしぬけの大聲、

「やア鬼幸先生、暫く、どうだね近來は、いくら高利貸でも君のやうに太くなると人を苦しめるのみでなく、たまには人の急場を助ける事もあるだらうなア、は、は、は、」

流石の鬼幸も、はッと思はず不意に胴腹を蹴られし心地、されど

元來が鬼といはる、都下第一の強か者、あれが兼て聞き及ぶ名高い鬼幸か、と一室の満員に蛇蝎の如く視線を注がれて、もはや遁げも隠れも出来ぬ以上は、わざと平氣に向き直りぬ、

「何、鬼幸、木戸幸四郎といふ戸籍面に立派な名があるんだぞ、また高利貸が、どうした、借りる奴あつて貸す職業だ、ふざけるな青二才奴」

「は、間違ひのない事を言つた筈だに、酷く怒つたね、さう氣に觸へなくつても宜からう、なるほど君の年齢に比べると青二才だ、は、しかし此青二才に去年の暮、背負投げを食つたのは氣の毒だつたよ、あの時の五千圓、外で幾何になつた」

「よけいな、お世話だ」

「は、ア冗談かと思へば全く、怒つてるな」

「華族の種にも、きさまの様な生れ損ひが出来るからね、油断のならない世の中だ」

「いや今ア華族でない、平民だよ」

「平民でも、そんな圖太い白無垢鐵火ア居るまい、もし食へなくなりやア何をするか、知れた奴でない」

「それこそ、よけいな世話だ、食へなくなつても金を借りに行かないから安心しろ」

噓で吐き出す如くにいはれて、みる／＼顔面は烈火の鬼幸、おもはず腰を捻り首を振りし拍子に耳へ挿める吸ひ餘りの糞を振り落せしが、今この場合にも本性を失はぬ奴、はつと我しらず手を伸ばして拾はんとすれば、ころ／＼と脚下へ待ち受けし廣行、び

しやりと踏み潰しぬ、

「や、この野郎」

額越に睨み上ぐるを、はたと笑ひながら袂より金口のエムシー五
六本を掴み出だせし廣行、掌に上せて差出しぬ、

「折角の吸ひ餘りを踏んづけて済まない、さア辨償する、いく
ら強慾でも、これで不足なからう」

びしやりと其手を叩き落せば普通の人間、差出だせし五六本を悉
く奪ひ取りて、

「よし、堪忍してやる」

これが雙方たゞ二人の喧嘩でなく、殆ど満員の乗客、いづれも片
唾を呑んで、見物の眼前、怯めず臆せず、じろくくと見廻しなが
ら、

「一文の稼ぐ事も知らずに、かういふ貰を煙にするとは、冥加
の悪い奴だなア」

乗客、あつと呆れて互に無言の顔を見合はし、本人の廣行また急
に腕を組んで感に堪へたる體、

「逆も凡人ぢやアない」

汽車の稻毛に著くや否、兩國の終點まで行くべき筈の鬼幸、ふい
と俄に飛び降りぬ、

やはり逃げ場さへあれば通げる奴、あれでも多少まだ凡人に似た
ところあり、

鬼幸の逃げ出だせし後は、乗客の視線を一人に浴びし廣行、中に
は親類か朋友の怨恨でもあるか、頻に痛快を叫んで拍手喝采する
ものあれど、今更ら思へば我ながら馬鹿げたり、

もし喧嘩の相手とすれば、たとひ勝つても手柄にならぬ奴、加之も吸ひ餘りの朝日一本にエムシ一五六本を取られしは利に於て負けたる我、いよく馬鹿げたり、いづれにせよ、天下に面白い事の多き今日、高利貸たゞ一疋を鬻弄して面白く感せし我、あまりに馬鹿げ過ぎたり、兩國のステーションへ著くや否、一時に吐き出されしブラットキムリムの混雑に紛れて、廣行また逃げ出しぬ、

八八

「良人、今日、どこへ入らつしやいましたの」
「ちよいとね、急に思ひ付いた事があつて佐倉まで、久しぶり

で廣國に逢つて来たよ」

「あや、佐倉へ、かげながら承りますばかりで、まだ御意を得ません、御機嫌よろしう御坐いますか」

「ひ、達者だ、相變らず元氣だよ、汝、やはり廣國の事を、何とか思つてるかね」

「そりやア良人、お目にかゝらなくつても、良人の御舎弟で御坐いますもの」

「や、汝の氣として、さうだらうな、實はね、廣國も汝の事を思つてるせ」

「あら、まア、お優しい事」

「性質、さつぱりとした奴で、猶更ら軍人だからね、べちやべちや饒舌らないが今日、別れる時、あの無口な奴が、汝の寫

八九

眞を一枚、くれというたせ、龜末には致しませんというたせ、
至急、撮ッて、送ッてやれよ、嫂だ」
いづこを佐倉の方角とも知らず、たゞ暮れ行く軒端より家外の空
に對うて、無言のまゝ涙の頭を下げしキタ女、これを見る良人の
廣行また無言のまゝ顔を反けぬ、

其六

郵便といふ聲に投げ込みし一枚の端書、キタ女まづ小婢より受取

りて見れば、同憲會よりの案内状、麴町區下六番町松川廣行殿と
せし上に、張紙して、下谷區谷中初音町三番地山村キタ方へ轉送
と書し、その下に朱肉の角印は、松川家執事の五文字、
たれ憚らぬ父上さへ御老體を馬車にも召さず、わざ／＼こゝへ忍
び來まして此身を我子の妻と憫れみ給ひ、まだ御目にかゝらぬ弟
御さへ、かげながら此身を他人とは思召さず此身の寫眞をと優し
う慰め給ふに、その家の召使はるゝ人として呼捨てに山村キタ方
とは、あまりに恨めしく、なさけなく、口惜しけれど、これを此
まゝ良人に見せて渡す妻でなし、
そつと人しれず張紙を取りて袂へ丸め、二階へ持ち行けば、
「ふゝ、同憲會からだね、久しく出た事がない、今年は一度
出て見ようかなア」

「學校時代の、お友達ばかり御會合なさるンですか」

「さうだ、同時に卒業したもので、四十一人の内、今この東京に、半分ぐらゐ居るだらうよ、こりやア番町の方へ来た端書だね、こゝへ来るには張紙があつたらう」

「はい、御坐いました」

「それを、どうした」

「もう、入らないものと存じまして」

「入らないものでも、わざと取るに及ばない、どういふ工合に張紙を仕て来たか、つまらないこつたが、ちよいと見て置く必要があるんだ、書いたものを其場で捨てるとは、汝に似合はないこつたね」

「以後、氣を付けまして」

「しかし破ッて捨てもすまい、今のこつたから、どツか此邊にあるだらう、探して來い」

いつにない不機嫌も、實は大膽なる内に案外の細心を備へて、をり／＼事と品によれば嚴格の廣行、

「是非、探して來い、ない筈はなからう」

キタ女、苦しげに袂より、丸めし紙を展べて良人の前、

「なんだ、袂へ入れてたのかい、早く出せば宜いに」

その張紙を見るや否、山村キタ方といふ文字に眉を顰め、一種異様の眼を光らして、おもはず鳴らせし舌鼓、

「けしからん奴だな、かういふ、わからない馬鹿どもが揃ッてるから困る、汝には氣の毒だつたね」

「いゝえ、何とも思ッては居りません、御用さへ届けば」

「まア堪忍しろ、暫時だ、今に、汝の下駄を直さしてやるよ、
ね」

「はう」

「時に、同窓會へ出たもんだらうか、やはり今まで通り出ない方が宜いかね」

「それは良人の、お考へで御坐いますよ」

「いや、かういふ事は乃公の考へよりも、却つて當り觸りのない汝の無意識に極めた方が宜いね、すべての上に眞ッ直で邪氣のない汝は或場合と或意味に於て乃公のため一種の暗示だよ、いくら止めても決行する事は決行するが、こんな事は汝の指圖に従つた方が無事だ、下手な易者よりは、ズツと遙に眞理を合ンでるからね」

「ほ、ほ、大道の賣卜者で御坐いますの」

「は、は、そりやア兎も角、同窓會、どう仕よう」

「さち、と今まで、お出にならないもんなら今年に限つて、變で御坐いますね、もし今年お出になれば來年から必ず、御出席なさらないと、いけますまい、第一それに今こゝで、申さば御身分も何も、變る時で御坐いませう、いッそ、もう一年このまゝ御見合はせ遊ばして、いかゞでせう、お友達と御疎遠になる、ならないは別と致しまして」

「よし、止めた、時に汝、何日、寫眞を撮る」

「はい、撮る事は撮りますが、お言葉に甘へて、これがキタで御坐いますと直に、早速お送り申しても、あまり失禮のやうで、また遅くなれば猶更」

「そんな汝、よけいな心配は入らんと、廣國は軍人だ、ほしいといへば早く送ッてやれ」

「恐れ入りますがね良人、近日また入らしッて、お談話の後で、ついでに、持ッて来た」と

「馬鹿な、當分まづ逢はないと約束して来たに、わざ／＼汝の寫眞を届けに行けるかい、それなら、本人の汝を連れて行くよ」

「ほ／＼、通常の手札形に致しませうか、四ツ切、カビネに致しませうか」

「何でも宜い、早く撮ッて送れよ、しかし束髪より白襟紋付の丸鬘にしてくれよ、どうしても汝は純日本式の盛装に限るよ、無論、半身でね、真正面は、いけない、七分といふところを、

三四通り撮るんだ、その内で乃公が見て、どれか一個、送ッてやらう」

遠慮しながらも胸に溢る／＼ほど嬉しきキタ女、うるさいと叱りながらも錦上に花を添へたき廣行、

「や、幸ひ丸鬘だ、寧ろ寫眞には結ひ立よりも宜からう、ちよいと撫で付けて今日、すぐに、これから撮りに行けよ、毎日毎日乃公ばかり勝手に出歩くから、たまには氣晴らしに汝、ついでだ淺草邊でも歩いて来るが宜い、天氣も、よし、小婢を連れてね」

「まゐッても、よろしう御坐いませうか」

「いゝとも、今日は乃公が留守番する」

わざ／＼鏡に對うて殊更に容色を作らずとも、うまれながらに天

生の美人、たゞ一口に美人といふ世間の色香とは違ひしキタ女が、
意を凝らし思を潜めて粧ひし風情、まだ晴がましく世に出でざれ
ど今は心に誰憚らぬ松川家の五つ紋、なほさら奥床しく品位を添
へ、自然の容姿を失はぬ黒羽二重の袴、しつとりと優美に和いで
青みかゝりし首筋の生際いよゝ、白襟に冴え渡り、手薄き此ごろ
の流行を逐はざる古代模様様の帯、ぎゆうと固く身を締めて、胡粉
を塗れるが如き單足袋の張り切りし脚下、わざと首を伸ばして差
覗きし良人の顔に、くるり横を向いて微笑を隠せし頬の邊り、い
はゆる神來の曲線美、人間業の裝飾一切を放れたり、
これ見よがしに透しし時候を急ぐ當世風、その上より蟬の羽に似
たる被布でなく、無残に勿體なや、花を包むが如く惜し氣もなく、
セル地の單衣コートを著流して、隻手を墨に跪きながら、

「変わります」

「混雑の中は、なるべく氣を付けてね」

「はら」

すつと立ちし後姿、この名玉いづこに一點の瑕瑾ありや、天下の
美術家に批評させたし、
わざと近處の宿俣を避けて三四町も先の辻俣二臺を走らせ、良人
の教へし寫眞屋に先客ありて一時間の餘を費し、やうく淺草行
の電車に乗れば、ぎつしりと満員の中より美人優待の特志者三四
人、おもはず立って吊革にブラ下りながら席を譲りぬ、
雷門に降りしは午後の二時過ぎ、仲店の往來に白髪のお爺まで振
り返らせ、觀世音には我身より第一まづ専念に良人の上を願ひ、
閑靜なる上野の森に馴れたる眼は、六區の繁華雑踏に召連れし小

婢を振返りながら、

「賑かだねエ、まア大變な人、平常に出ないから田舎者と同じ事だよ、ほ、ほ、」

「今日は奥様、土曜で御坐いますから、猶更」

「あ、土曜だツたね、今日これで、あすの日曜は、ドンなだらう」

「あまり向は混み合ひますから、此方の池の方へ廻ッて、あの茶店へでも奥様」

「さうねエ、あ、いふ中で揉まれるより、あの茶店で池を隔てて見た方がよかりさうだね」

花屋敷の前より横に樹間を縫うて、茶店の方へ歩み出せし背後より、不意の聲、

「おキタさん」

はッと驚きぬ、驚きも驚愕、この淺草の雑踏中、おもはぬ不意に我名を呼ばれて、

呼ばれし聲に振返れば、あまり近ごろ見ざる櫛卷の頭、洗ひ晒せし木綿袴に古びたる半襟の四十女、はや山の端の摺り切れし晝夜帯に前垂がけのチビたる東下駄、浮世の下司馴れし氣輕に小腰を屈めて、にこ／＼しながら、

「まア、おキタさん、大層、立派な奥さんに、おなりだ事ねエ實は先刻から、もし間違ッちやア濟まないと思ッて、さんざ見直したんだよ、さうねエ、もう七八年になるもの、あの時分よりは猶お前さん、容色が上ツたよ、ほ、ほ、ちよいと分らないくらゐだ、今、何處」

キタ女が十八の暮、あたから清浄無垢の身を毒蛇の舌に舐められンとして、今の廣行に救ひ出だされし頃、手を以て遮らねど口車に乗せて我身を敵の餌食に運ばむとせし女、現在は知らず其時は髪結のお留、

逢はずとも忘れぬ遺恨、にくい女と思へど、こゝは淺草の公園、すぐに人立の中、聞かせたくない下女を連れて、いやな事も言ひたくない辛さ、わざと絞り出す微笑を浮べて、

「あや、まア、どなたかと思ひましたに、お珍らしい事、久しく、お目にかゝりませんでしたねエ、立話しも何ですから、冤も角あの茶店へ」

「私もね、おキタさん、その後の事に付いて、いろ／＼お話し仕たい事がありますよ」

池の端の茶店に入りて、小婢を彼方の床几に隔てさせ、四邊を見廻しながら、

「やはり今、あの頃と同じ、御職業ですか」

「これといふ外に藝のある身ぢやアなしね、仕方なしに今ア千束町で、やはり手を油だらけにして居ますが、いやもう、さまく／＼不運つゞきで、よく無事に今日まで来たと思つて居らぬですよ、しかしまア、お前さんは結構だね、お見かけ申したところで、さぞ御安樂なこつてせう、第一あの時分から汝さんは、どうも出世をなさる人に出て来たよ、争はれな

いもんだねエ、私の思つた通りだ」
「あら、困りますよ、さういはれては、ほ／＼、只、どうか、斯うか、暮らして居りますばかりで」

「御允談を、時に只今お住居、どこですの、旦那様は、どういふ方、今だから、いひますかね、あの時分まだ初心だと思つて油断して居た、其お前さんに皆が出しぬかれてさ、あつと言つた後での評判に、あまり腕が冴え過ぎて、どうも影で糸を引いて居たらしい人があつたといふ事だね、ほゝゝゝおキタさん、その旦那でせう、つまり好いて好かれた人と楽しい苦勞の果に、めでたく添ひ遂げた御夫婦なんでせう、是非お伺ひ申したい事ね、ほゝゝゝ」

あの時、その後の事、實は我より問ひたさ聞きたさ山々なれど、これを問へば今の住居を問ひ返さるゝ身、これを聞けば良人の名もいはで叶はぬ身、たゞ此まゝ無事に別れても毒蟲に螫されし心地、うかとすれば鞘なき白刃を抱くが如しと、キタ女、そつと身

を捻りながら胸帯の間より五圓紙幣二紙、紙に包みし手許を、ちらと眼早く見て、

「ほんたうに、御立派だ事ねエ、昔馴染のお心易立に、つゝ、うッかり、おキタさんだなぞと、ほゝゝゝ」

「あの、これはね、ほんの、失禮ですが、お菓子に」

「まア貴女、およしなさいよ、そんな事は、いゝえ戴いたも同前、おや、さうですか」

「其うち、私の方から一度、おたづね致しますから、千束町の、どちら」

「ごたゝと這入り込んだ面倒なところですから、始めての方々に、ちよいと分りませんよ、それよりも千束町の二丁目で、髮結のお留といへば」

「いづれ、また」

懇懃に挨拶を残して、一圓の茶代と共に小婢を急がせ、其まゝ、足早に山門の方へ、をり／＼見返りて、

まゝならぬ世の中、同じ思はぬ不意の逢ふ瀬ならば、観自在とやら此士は御佛の靈地、このキタに生れて顔も得しらぬ父母あるを哀れと思さずや、せめて行方の知れぬ伯父ならばと、仲店の織るが如き群集雑踏も、何とやら果敢なき無常に淋しき心地、

また雷門より電車に乗る前、小婢を振り返りながら、

「折角、楽しんで来て汝、つまらなかつたねエ、あす一日お暇をあげるからね、ゆっくり一人で、おいで」

「案外、早く歸つて来たね、どうだつたい、久しぶりで面白かつたらう」

「はい、賑かでは御坐いましたが、もう淺草なんかへは以後、決して、まわりません」

「なぜ」

「何故でも、キタは全體、あゝいふ晴々とした、陽氣な混雑の中へ出るやうには、うまれて居らないやうで御坐いますよ、やはり舊式に浮世の影で、淋しう暮らした方が、自分の性に合つて居りますから」

「はゝゝ、妙に悲觀したね、つまり馴れないからだよ、時に何か、おみやげは、神妙に留守番して居たせ」

「おみやげ、ほい、大變な、おみやげが御坐いますよ」

「どういふ、みやげだ」

「ねエ良人、お留といふ女を、御存じて御坐いませう、髮結のお留、そら例の時、さんざ憎い邪魔を致しました、いやな女あの時分、常にキタの髪を結って居りましてさ」

「む、彼女」

「あれに良人、逢ひましたの、不意に呼び止められましたね、まア、どんなに驚愕いたしましたか」

「そいつア驚いたらう、しかし何事もなかつたかね」

「いろ／＼と變に、うるさく、からまつて来て、頻に只今の住居や何かを聞かうと致しましたが、あゝいふ女には良人も金が第一の魔酔劑で御坐いますからね、兎も角も、その場を無

事に逃げて歸りましたが、全く一時、どう仕ようかと思つて、ほい、キタの壽命は、たしかに一年を縮めました」

「うまくやつた、なアに六七年も経つた今日、まして一點の疚しくないこつたから、たとひ、どんな事があつても大丈夫だがね、やはり面倒だ、はい、久しぶりの娛樂が、ひどい淺草だつたなア」

「それに良人、彼女が淺草の千束町に、住んで居るさうで御坐いますから」

「赤い佛の堂の後に白首の鬼が住んでると聞いたが、そこで髮結といへば彼女、つまり鬼の角かくしを職業にしてるんだな、はい、しかし考へて見ると、乃公と汝が新郎新婦の寫眞を並べて、出したくもないが新聞へ出るやうになれなかつただ

け、互の運命に多少の沈瀾があつて、戀と愛は遂げても、やはり人生に一の缺陷だな、どこへ放しても押しても立派に自慢の出来る汝を、かはいさうに、年に一度か二度、たま／＼の浅草で、あゝいふ女のため遁げて歸るやうにしたのは、乃公の罪だ、今日の浅草に限らず、どうしても乃公は汝の生涯に女一代の幾分を薄聞くしたやうだね

「いくら世間に薄聞くツても、キタは、このキタは心の中で、あかるく思つて居ります」

あはや涙に曇らむとせしを、心機一轉の廣行、

「第一、どこへ出ても汝は眼に立つから、わけないよ、も少し、わるくツても乃公は堪忍したに、はゝゝゝ」

其 七

乃公は汝の生涯に女一代の幾分を薄聞くしたとの一言、キタ女の身に取りては、あらむかぎりの榮華を盡して世間萬人に羨まるゝよりも嬉しけれど、またこの良人に眼を曇らせて現在かくいはせしかと思へば、妻の身として腸を割かるゝよりも猶更ら辛し、かはいさうに年に一度か二度、たま／＼の浅草で、あゝいふ女のため遁げ歸るやうにしたのも乃公の罪とは、勿體なや、年に一度か二度の浅草へ行かずとも、春の花、秋の月、君たゞ一人を守り

て夢さらく何の不足もない我身、あゝいふ女のため遣げ歸りしは、かう生れたる我身の不運、これを歎いて良人の罪とするキタと思召してか、色を賣り肉を鬻ぎて一時の虚榮に憧るゝ身ならば、たとひ心は闇くとも世に晴がましく孔雀のやうなる羽を伸して振舞へど、おもひし戀を遂げ情に包まれて生涯を楽しく送る身は、たとひ葉蔭に隠れて世は闇くとも人しれぬ心は晴れて静けき我身、女一代いづこの誰を見習うて誰にか疚しく誰にか恥づべき、肥馬輕車を驅りて交際場裡の夜會に招かれずとも、自動車を馳せて郊外春秋の花月を探らずとも、夜汽車の寢臺に夢を伴うて旅の空に都の香粉を誇らずとも、この上野の森影に朝夕の塵を避け、この借屋住居に衣食も足りて、この八疊と六疊の二階に身も快か

らず人にも妨げられず、いつはりのない真心に、をりくは叱られ、隔てのない戯れに、をりくは笑はれ、うかと事を仕損じて此女めと睨まるゝ時、おもひの外に譽められて汝なればこそといはるゝ時、その嬉しさ、その樂しさ、金殿玉樓の富貴にも代へ難く、世界の寶石を身に纏ふ榮華にも代へ難し、もしこれを、古き道徳に囚はれしといへば、わざく我に新らしき道徳を求めずとも、此まゝの境涯さらに何の不足もなし、もし過去の習慣に陥れりといへば、わざく人に囁かれて立騒がずとも、我に將來の不安を來すべき恐れなし、たとひ舊思想に蔽はれても、新思想の自覺を叫ぶ用なく、たとひ生命に意義なしといはれても、これ以上の存在を認めらるゝ用なく、玩弄物といへば、玩弄物となるも恨まず、犠牲物といへば、犠牲物となるも悔いず、

涙脆く心弱く世に後れても、自然に出る涙を止めて世に先だつ希望なし、

時代の思潮とやら、いかに我生涯を此まゝ踏み潰して過ぎ去るも口惜しからず、時代の要求とやら、いかに我運命を此まゝ、餘所に振捨て、馳せ去るも口惜しからず、妻として良人に愛せらるゝ我身は、
都大路の流行を競ふデパートメントに出入せずとも、演劇興行の美を争ふイルミネーションに照らされずとも、ダイヤの輝きルビの光り真珠の飾りに身を粧はずとも、神のみ知ろしめす我に人しれぬ幸福ありと思へば、
人に羨まれて人に誇り、世間に持て囃されて世間に騒がるゝよりは、人は、人に知られず心に誇りて世間に騒がれぬ我身、いかに樂しき

晴れて世に立ち世に唄はれながら隠れて袖に涙を包むよりは、晴れて世に立たず世に唄はれずして隠れし袖に笑を包む我身、いかに嬉しきぞ、

家庭の圓滿といふ事を、さも難しげに教へ教へらるゝ人の哀れさよ、一夫一婦といふ事を、さも業々しげに問題とする人の氣の毒さよ、戀愛の神聖といふ事を、さも珍らしげに解釋する人の笑止さよ、

世に
隠れて

「ねえ良人、このキタは性來、かやうな行届かない不束なもの

で何一個、これといふ取得のない事は自分ながら、よく承知いたして居りますが、わけて其中で、どういふ事が第一の疵で御坐いませう」

「だしぬけに妙な事をいふね」

「だしぬけでは御坐いません、絶えず常に、自分で、さう思つて居りますから」

「は、い、まづ女としては、無疵な方だらうよ」

「さう良人、水臭く他事のやうに仰しやらずと、これが悪いとか、それが汝、いけないとか、はつきりと、深切に」

「また變に、をかしの事を考へ出して來たよ、つまり善くないといへば汝、さういふ點が善くないせ、乃公が何とも思つて居ないに」

「思つて居らつしやらなくつても、キタに悪いところのない善は御坐いません」

「まるで、言ひ掛りだね、は、い、い」

「だって良人、さも蒼蠅く、面倒さうに、まア無疵な方だらうよ、それでは良人、さやうで御坐いますかと申し上げられませう」

「いよ、喧嘩腰だ、は、い、い、ちやア折角の御尋問だから、いふよ」

「はい、どういふ事が一番、わるう御坐います」

「まづ汝の一番、わるいところは、涙だ、自分で物を思ひ過ぎて、何か事があると、すぐに涙ぐんで、其ま、黙つて仕舞ふだらう、あれが汝、よくないね」

「は、泣蟲が、いけませんの」
 「泣蟲も聲をあげて、わあッと陽氣に泣き出すのは、或場合と或意味に寧ろ滑稽で、いゝがね、汝のやうに、胸に迫つた事を、じいッと堪へて、その張り切つた眼に一ぱい今にも落ちさうに溜めて居ながら、さて落しもせず流しもせず無言に唇端を噛み占めて、差俯くだらう、あれが乃公のため實に一種の責め道具で、をりゝあれを遣られると乃公は閉口だよ、二の矢が繼げない、いくら怒つて居ても腹が立っても、何だか妙な氣になつて、刃向ふ事が出来ない、あの泣き工合は、汝の身に取つて千人力だ、考へて見ると、つまり汝の涙管は眼に出るまでの間、頗る流通よく出来てるが、眼の邊に何か堰き止める障礙物があつて流れないんだな、いはゆる涙の淵

瀬、あれが一時に流れ出せば、それこそ涙瀧の如しだ、は、は、」

「もうキタは何事も申しません、泣くにも世間普通の一人前、満足に泣けないやうなもので御坐いますから」

「あゝ、さうでないよ、さう取つては困る、天下萬人の涙よりも汝の眼に溜めた一滴に、強い力があるといふことかからね」

「よろしう御坐います、強くつても、弱くつても、どうせ、御冗談の、お笑ひ草になるキタですから」

「さア、また喧嘩の出やうが違つて来たぞ、今日は汝、どうしたんだい、何事にも只、はいゝといふ汝が今日に限つて、いちゝ搦まるぢやアないか」

「いち／＼キタが搦まるンで御坐いません、わざと良人が搦ま
せるやうになさるンです」

一〇

「あ、ちよいと此邊で休戦しよう、これぢやア際限がない、
世の中に自分の善いと思つてる事を悪いといはれて怒る奴は
あるが、自分の悪い事をいうてくれないため腹を立てる奴が
あるかい、は／＼」

「何事でも良人は、すぐ御冗談になさるからです、良人の一番
お悪いのは、それで御坐いますよ」

「は／＼、今度は乃公の悪い方に廻つて來たね」

「全くで御坐います、どれが眞面目か、どれが冗談か、眞面目
と冗談の境が、ごちや／＼で少しも分りませんもの」

「は／＼ア、それが乃公の一番、わるいところだね」

「い／＼え、まだ外に澤山、御坐いますよ」

「まだ外に澤山あるウ、ついでだ、すツかり舉げて見ろ」

「あまり澤山で御坐いますから、控へ帳を出して見せんと、
ついでぐらゐでは逆も數へされません」

「は／＼、つまり自分の悪い事を一個か二個、いはして置いて
乃公の悪い事を、ランと並べる筈だツたんだね、そんな顔を
して居て汝は、なか／＼油断のならない腕があるよ、いはゆ
る寡を以て衆に敵するの策を得たりだ、危険、危険」

「は／＼、もし危険で策のあるやうなら、また少しは御用に立
つ時も御坐いますが、つまり薬にも毒にもならない、あつて
も無くて、かまはないキタですから」

「どうして、どうして乃公のためには萬病これ一藥の名薬だ、

もし汝がなけりやアこの松川廣行、或は一代の放蕩兒になつたかも知れないせ、汝といふ名花一輪があるから、いくら春めいても餘所の花見は仕なかつたよ、はゝゝゝ」
「こんな日蔭に咲き損うた草花よりも御遠慮なく立派に晴々とした、お花見を遊ばせば宜しいに、とんだまア、お妨げを致しました事」

「や、此ごろは汝、なか／＼うまくなつたね」

「何がで御坐います」

「何か知らないが、うまくなつたよ、的がなくて此くらゐなもの、もし實際に的でもありやア、それこそ大變だ、どんな目に逢はされるか知れない、恐るべし恐るべし、はゝゝゝ」
「どうとも、お好きなやうに、お笑ひ遊ばせ」

其 八

「時に今夜ア散歩がてら、ぶら／＼上野の廣小路邊を歩かうと思つてるが汝、同伴に行かないか、いろ／＼と面白い露店が出てるせ」
「さやうで御坐いますか」
「困つたなア、いよ／＼御機嫌を損じて仕舞つた」

都下第一の高利貸、本所割下水の鬼幸、あけても暮れても手に放

二二四
さぬ算盤を膝の上に突き立て、取るだけの利息を取りあげて足らぬところを證文に書き加へし後、さてと向き直りしが、向き直られし客は田島辯護士、法學士の肩書も法廷の才物も此奴の前では一文の價値なし、

「まア兎も角これで田島さん、一段落は付きましたか今後、かういふ面倒な事は無いやうに仕て下さい、第一また手数が多くて困りますよ」

「困るのは其方より此方だ、さう高利の拂った勘定残りを證書に書き加へて、その上また面倒だとか手数だとか、すきな不足をいはれるんだからな、はゝゝゝ世話アない」

「しかし田島さん、貴君の方で約束通りに仕ないから自然、かうなるンでさアね、かうならないやうに、すれば宜いぢやア

ありませんか」

「仕たいよ、いくら仕たくツても出来ないから仕方なしに已むを得ず、せつせと稼いで君等の土持をするのさ、考へて見ると長らくの間、神妙に運んだよ」

「はゝゝゝわざゝ頼んで仕て貰ったやうですな、全體この頃の人は間違つてる、早い談話が親でも兄弟でもない無縁の他人に金を借りて怒るんだから、よほど儲からないと貸す方に割が悪う」

「あまり悪くもない筈だ」

「いや、よくもありませんせ、骨の折れる事は一通りでなくツて、加之中には、随分、ひどい奴がありますからな、時に田島さん、ひどい奴といへば例の松川、彼奴、あれぎりです

「あれぎりにも、ナンにも、ありやア手に終へない、流石の僕も二度と再び盛り返す勇気がないよ、ことしの二月、たしか三日だつたね、うまく仕組んだ例の一件で、九分九厘まで首尾よく落ちて来たから、こいつ占めたと手形の裏書、いよいよ三千圓といふ段になつて吐す事が癪だ、君も運の悪い男だね、せめて一月か二月前に来りやア同じ級から出たんだもの、お易い御用だ何でもないに、遅かりし由良之助で判官殿、もう切腹して仕舞つた、かねての廢嫡決定、明日から無資格無資産の丸裸一貫だ、もし置いてくれりやア君の玄關番にでもなるよと、かうだ、おまけに、どツかへ圍つてある情婦の惚惚まで聞かされて歸つたが、ありやア無効だ、根が華族で無

遠慮に馴れた上、人を馬鹿にする調子があつて、ぶらぶらしく度膽の太い奴だから煮ても焼いても食へない、うか／＼すると此方が三盃酸にして食はれさうだ、は、／＼しかし廢嫡は實際で、全く屋敷を出たといふこつたが、此間あつた我々の同意會へも面を出さない、無論、最初から一度も出席した事のない奴でね」

「田島さん、實ア其後、私が逢ひましたよ」

「どこで」

「千葉から歸りがけの、汽車の中で」

「そいつア面白かつた、君のこつたから、まさか其まゝ黙つちやア置くまい」

「ところが、面白くありませんよ、此方より先に彼奴の方が黙

二二八
ッて居ませんからね、加之も狭い二等室で、ぎっしりと詰った満員でせう、その中で野郎、だしぬけの大聲に、や、吐したも吐した、かりにも大名華族の種に生れた奴が、よくまア、あゝ毒々しい事を淀ますと順序よく吐しやアがッたもんだ、もし汽車の中でなきやア年は取ッても私だ、あのみ、無事に置く奴でない、去年の暮といひ、今度といひ、その以前この私を新聞の黒枠に入れて死んだ廣告した悪戯も、きッと彼奴に相違ありませんな

「はゝア、よほど酷く、やられたね」

「酷いにも田島さん、物事は宜い加減といふ程度がありますよ、考へれば考へるほど残念で堪らない、思ひ出せば出すほど心外だ、少々の資本金をかけても彼奴だけは是非、復讐して見

たい、誰か田島さん、彼奴の鼻ッ柱を捻ち上げる人間はありませんかね、五十銭や一圓の日當は出しますぜ」

「はゝゝ君が日當を出すといふくらゐだから、よくくこのコッた、一通りや二通りの残念さでないね、外の人の生命がけと同じ程度だ」

「冗談ぢやアない田島さん、全くだ、全く日當を出しますぜ」

「それほど残念で堪らなきやア、どうだね勇を鼓して僕が、も一度、押掛けて見ようか」

「どういふ工合に、押掛けてますな」

「僕の押掛ける工合より、君の僕に對する工合を、どうしてくれる、いくら貧乏しても、この田島ア五十銭や一圓の日當を動けないよ」

「ぢやア田島さん、思ひ切ッて、かう仕ませう、もし貴君が押掛けて、うまく野郎を深水へ落とし込んだら、一月、空にする約束で」

一三〇

「一月、空にする、どう空にする」

「どラッて、一月ですよ、今の勘定で書き直した元金八百五十圓の證書面でせう、その三月二割で百七十圓の一月分、つまり五十六圓六十六錢六厘、あとは切り捨てませう」

「は、は、は、からなッても流石に君だ、實に恐れ入ッた細いもんだよ、しかし一月分の利足五十六圓六十何錢ぢやア動けないね、は、は、は、」

「さういふ田島さん、貴君は慾しらずだから困る、貴君だッて彼奴のため現に今年の二月、いはゞ手玉に取られて來た怨恨

があるでせう、わざ／＼何も私のため頼まれるばかりでもない事に五十六圓六十六錢六厘といふ錢が、不意に儲かる仕事ぢやアありませんか、長年の取引上、おついでに無代で仕て下すッても宜い筈だ、どうです、いッそ無代で働いて貰へますまいか、その代り三個月の返済期限を文句なしの六箇月に延ばしませう」

「は、は、は、ます／＼手厳しいな、いや實はね、日當も入らない一月の利息も、まけてほしくないが、今度もし押掛けて、うまく彼奴に連帯さすとすりやア、幾何、貸せる、彼奴を今の境遇としてだよ」

「今の彼奴では、貸せませんよ、ありやア華族で子爵の相談人となッてる時の價値です、叩き出されて丸裸になッた以上、

一三一

逆さに吊つて本人の鼻血ぐらゐ出るかも知れませんが、私の算盤からア三文も出ませんね」

「いや、さうでない、松川家は子爵中の第一で華族中の財産家だ、その長男として、どういふ工合に廢嫡されたか、よし廢嫡されたとしても、そこは君、世間普通たゞの家を追ひ出された馬鹿息子ぢやアないよ、第一また今日の境遇になつたのが寧ろ僕の乗すべき點で、なアに、まかり間違へば廢嫡されて居ても松川家の玄關へ吐鳴り込む手段と方法は、いくらもあるさ、また今日の本人、どういふ生活状態か、それも實見した上で算盤に這入らないとも限るまい、兎も角も君に損をかけず僕の八百五十圓を元利もろとも彼奴に背負はして來て、たしかに取れるといふ證據を擧げてくりやア、よからう、ど

うだね」

「なるほど、あもしろい、田島さん、それなら宜しい、それで野郎を、ぎゆう／＼いはしてやりたい、考へて見ると廢嫡されても彼奴、元の友達で今日まだ交誼の好い華族の三人や五人、持つてるでせうから、さういふ奴に連帶さして、別に大きい口を二件三件、やりたいもんですな、こりやア田島さん、貴君の分を彼奴に背負はせるだけぢやア聊か物足りない、うまく彼奴を乗せて、その外に大きく別口で、やるに限りますよ、は／＼、」

「そろ／＼慾の方が勝つて殘念な方を忘れて來たんぢやアないかね」

「忘れはしません、もし面白い儲け口がありやア其間、ちよ

いと暫く残念の方を中止しますね」
「残念の中止は、よかつた、こいつア振ッてる、は、は、は、」

其九

ぶらくと歩くにも、たゞぶらくと動くのみでなく、その足を運び身を運ぶ生理上の運動以外、人しれぬ頭腦の中も何等かに向うて進みつゝ運び行く松川廣行、机の前に腕を組んで小首を捻るよりは、

また今日も例に依つて午後の散歩、ぐるりと池の端を巡りて東照宮の阪を上り、五重塔の此方に聊か草臥れし身をステツキに支へながら、エムシを口に咬へて袂のマツチ、幾度か風に擦り損ふ折しも、

「松川さん」

呼ばれし聲は耳に入れど、慌てゝ振向きもせず、また二三本マツチの火を風に取りられ、やう／＼蓑に煙を吹いて後、悠々と徐ろに見返れば、田島辯護士、はや眼前に近く小腰を屈めて、満面の微笑、

「先達は失禮しました、あれ以来の御無沙汰を、お詫び旁、は明日お伺ひ致さうかと思つて居りましたところで」
「やア、あの時は僕の方が失敬でした、折角の御依頼を、」

「し今ア番町に居ませんせ」

「いや現今の御住居、承知して居ります、今朝も屋敷の方で
きましたから」

「は、浪々の遣る瀬なさで、暫し浮世を忍ぶ假の宿といへば、いかにも洒落てるが實際なか、洒落どころでなく、いよ、自分に働いて食ふとなりやア蒼蠅い面倒なもんですな、時に田島君、わざ／＼来られるに及ばない、もし明日、何か用があれば幸ひ其用を歩きながら、今日こゝで聞きませうか、この上野を自己の庭園でも散歩してゐる氣でね、は、は、は、」

「相變らず、潑刺として實に元氣なもんですな、しかし歩きながらは少々、あまり庭園が廣すぎますよ、は、は、は、」
「ぢやア、どツか、茶店でも」

いへば此ま、思へば直に先立ちて、のそ／＼と歩み出し、わざと奥まりたる座敷建築の茶店に入らず、春の花に取残されて色の褪めし赤毛布の床几に腰うちかけ、

「田島君、こゝが宜い、どうです新緑の葉影、たまらないね、かうして地の上へ樹の間から漏れて来る日影の工合、何ともいへない心持だ、花よりも月よりも僕は春夏の交に最も愉快を感じてゐるね」

「うす汚き婆の持ち出す出がらしの溢茶を啜り、まだ残る貰の煙を心地よげに吹きながら、」

「時に田島君、どういふ用です」

「かういふところで、お談話するのは甚だ何ですが、是非、御工夫を借りたい事が御坐いますね」

「工夫、自分の一身上さへ、實は工夫に困ッてる時ですよ、その僕へ工夫を借りたいは、聊か見當違ひぢやアありませんかね」

一三八

「いや、決して違はない心算で伺ひました、工夫は分量と程度の問題で、同じ困り方にも甲と乙の相違がありますから、さし當り田島の願ひたい工夫は無論、貴君の工夫を妨げるほどの事ではないと、考へましてね」

「は、ア、なるほど、さういふ意味ですか、つまり先達は金を借りて来て今日は工夫を借りて来たといふ理由ですね、よろしい、わかりました、あの時は生憎、あんな場合で奈何せん、金は折角の御依頼に應じられなかつたが、もし僕の頭腦で出る工夫なら御遠慮なく、ムンダンに使ッて下さい、しかし自

分の事に使ひ過ぎて後だから、あまり宜い工夫が残ッて居ますまいよ、失敬ながら、もし使ひ餘りで御用に立てばです、全體、どういふコツです」

「いはゆる滔々たる辯で、どうも貴君には一歩、いつも機先を制せらるゝやうな氣がして」

「は、\、滔々たる辯は君の方が本職でせう」

「その本職が、やられますよ、は、\、\、とところで外の人と違ひ、貴君に向ッては寧ろ、露骨に要領だけ」

「露骨、要領、簡單、それに限りませぬ」

「結局、お願ひする點は、やはり金に歸着しますが、しかし直接に金そのものではありません、つまり金を産み出すべき工夫で」

一三九

「さア直接でも間接でも、金といふ事になれば殆ど零で、いくら上手に使っても此奴、使ひ道のない人間ですせ、は、は、は、それとも君、もし金に對する廢物利用が出来れば寧ろ僕の方から、その工夫を願ひたいもんだ」

「こりやア恐れ入った、金に對して人間の廢物利用は實に警句だ、は、は、しかし其處が分量と程度で、貴君ア自分に廢物と思つて居られても、この田島から見れば決して、どうして、廢物どころですか、なか／＼まだ立派に通用しますよ」

「お世辭は止して田島君、この松川まだ金に對して、全然これ廢物でないとするれば、つまり、どのくらゐの信用があるでせうな」

「そりやア貴君、一萬でも二萬でも、貴君の御工夫と御決心次

第です

「ところで、君の僕を利用する額は、どのくらゐです」

「なアに、ほんの僅で、さし當り二千圓もあれば目下、大に助かります」

「なるほど、僕に一二萬の工夫が出来て、その僕に要求する君の必要が差當り二千圓とすれば、何でもない、まづ一割だ」

「さうです、わづか、その一割に殆ど苦心慘憺を極めて居りますよ」

「そりやア氣の毒だ、ちやア田島君、どうです、僕は君のため幾何でも利用されるから、まづ僕に二萬圓の出来る工夫をして下さい、もし二萬圓、出来れば其三割、二三の六千圓を君に呈しませう、失敬だが手数料として、また僕も不意に一萬

四千圓、懐中へ這入れば當分、樂だ、先達は君、かういふ工夫も何もなくて、只あゝいふ場合に金を借せと迫るから無理だよ、あの時だつて今日のやうに君、うまく僕を利用して出来るやうにすれば出来たかも知れない、考へりやア君よりも寧ろ僕の方が残念だつた」

「いかに、さうでしたなア」

「あまり君が自個本位で来たからさ、やはり世の中は相手も助けて自分も助かるといふ、いはゆる雙互關係の利益上より誠實に割り出した工夫でないとな無効だ、いけない」

「全くです、はゝゝ、時に今いふ二萬圓の工夫ですが、誰か、外に、相當の人が御坐いますまいか」

「外に相當の人間とは、僕の外に君、まだ人が入るんですか」

「つまり貴君の連帯者で、以前の御朋友か何か」

「や、君、ちよいと待つた、それぢやア談話が違つてる、僕は僕一人で二萬圓の金が出来るもんと思つて居たから、その手數料として君にも六千圓を出すと云つたが、わざゝ外に人を頼んでまで僕ア金を作りたくない、第一また連帯といへば證文を書いて借金するこつたらう、はゝゝ、それは君、工夫でも智慧でも手柄でも何でもない、貸す貸さないは借置いて世間普通、いやしくも金を借りようとする奴の一般に誰でも考へる藝當だよ、はゝゝ、大變な勢ひで眞面目に仔細らしく工夫工夫といふから、どんな神算鬼謀かと思つたに、やはり借金の意味だつただね、なあんだ馬鹿馬鹿しい、元の友達を義理詰の連帯者にして高利の金を借るぐらゐの事は田島君、

わざ〜君に教へられなくつても承知してるさ、しかし松川
廣行、金を借りるに他人の信用まで借りて金と人との二重借
なんかア斷じて仕ない、この理論からいふと僕に對する君は
三重借り四重借りを目的にして來た人間だ、よくないねエ、
加之も君、借金に金のない奴が苦しませに、すべきもんで
ない、金のある奴が、何等かの事業上、その足らざるを借り
るもんだ、のみならず返す的のない借金は欺偽取財で、約束
の期限を過ぎても道徳上に於ける一種の犯罪だ、や、うかう
か饒舌つた、この邊は君の講釋する領分だつたね、は、は、
免も角も君、金を借りる事は一切、御免を蒙らう、また君も
僅千や二千の端金で凌げるやうな苦勞なら、寧ろ金で凌がず
に努力奮闘して凌いだ方が宜からう、借りた金を返すのは、

働いて儲けるより一倍の力が入るといふこつた、もし借りも
せず働きもせずに出來る工夫があれば君、その時こそ教へに
來てくれ給へ、田島君これで失敬するよ、生憎散步の途中を
引き止められたから持合はせがない、この茶代を君、たの
みますせ

すつと其ま、後も見返らず、のそ〜と立去れば、取殘されし田
島辯護士の呆れ顔、眼は白黒に面は赤くなり蒼くなりて、
十二三間の先にて俄に立停りし廣行、こゝで振返るかと思へば、
吸ひきりし葦の火を新らしき葦にうつして、また其ま、歩み出だ
しぬ、

初音町への近道あれど、時間の割合に運動の足らざりしか、わざ
と博物館の前より動物園の横に出でし時、彼方より來かゝる一人

の男、いはゆる破帽弊衣の語を遺憾なく實際に現はして、加之も病後の落魄、みる影もなき書生體、道を避けて行き過ぎむとするを、すれ違ひに振り返りし廣行、

「やア君、安藤君ちやアないか」

「ずつと立寄れば、顔も得あけず、居縮むが如くに差俯いて、

「松川君ですな」

「どうしたんだい君は、久しく逢はンねエ、二年までは同級だったのが、急に半途で去って仕舞ったから」

「生意氣に妙な考へから、途中で學問を捨てたのが、やはり悪かつたんですな」

「は、ア、何か事業でも、やり損つたんだね君」

「なアに事業の失敗だけなら、かうも酷く、なりませんがね、

つまり放蕩の結果ですよ、さんざ馬鹿を盡した自業自得で、いは、當然の成行ですから、舊知の人々に對しても、汗顔の至りとか面目ないとかいふ程度を越して仕舞つて、今ちやア哀を乞ふ資格もありません」

落ぶれた奴にかぎりて、その落ぶれた理由に一種の申譯を加へ、さも不足らしく不平らしく愚癡を滾す筈なれど、たゞ自業自得の結果とし當然の成行とせし一言、却つて面白く氣に入りし廣行、ずつと差寄りて、

「君、病氣もあるやうだね」

「多少、脚氣のやうな點もありますか、大體は、營養不十分からですよ」

「今ア君、どこに居て、何をして、食ッてる」

「そこまで聞くのは、聊か残酷ですなア、此まゝ別れさして下
れ」

一四八

「いや、さくだけの考へがあつて聞くんだよ君、しかし残酷だ
から止してくれは面白い、ぢやア是以上、押して聞かない、
時に安藤君、ちよいと其處まで僕と同伴に来てくれ、遠くな
い、つい近くだ、初音町まで」

「どういふ用です」

「まア何でも宜い、来るさ」

其まゝ手首を掴まンばかりに伴うて、我家の門口、五六間の此方
に待たせ、急ぎ足に駆け込みしが、すぐに再び飛び出して、紙に
包みしものを安藤の懐中へ捻ぢ込みぬ、

「黙ッて君、取ッて置いてくれ、決して君を侮辱する意味ぢや

アないせ、實は僕も廢嫡されてね、あれが今の住居だ、しか
し君は現在の境遇を一轉して兎も角その落魄を脱し得るまで、
たづねて來ない君と信じて此まゝ別れる、もし今日の君が一
錢五厘を費して端書の禮狀でも、よこすやうぢやア無効だぞ、
しッかり、やれよ君、だが身體は大事にするが宜い、器を丈
夫にして置かないと、さアといふ時に物を入れる事が出來な
いからね」

「良人まア、何で御坐いますの、五十圓も、今あの人に」
「汝、見て居たのかい」

「さア出せ、そら出せと、あまり變ですもの、ちよいと二階か

一五〇

「安心したらう、女でなくって、は、は、ありやアね、學校時代の友達で、あゝなつた奴に出逢つたからよ、さう以前は親しくも交はらなかつたが、なか／＼面白い點のある奴だ、彼奴あのまゝで凹垂れまい、どうかなるだらう」
「まことに結構な事では御坐いますが、これから良人、さう度度あゝいふ人を、お連れ遊ばしては困りますよ、只今の御身分で一口に五十圓といふ金は、ねエ良人、おわかりで御坐いませう」

「わかッてる、わかッてる」

「しかし、今の人は嘸、嬉しう御坐いましたらうね、あゝいふ

風俗をなすツてるンですもの」

「だから考へて見ると、安いもンだよ」

「いくら良人お安くても、この後は、いけませんよ」

「はい／＼、かしこまりました」

其 十

度すべからざる不孝の子も、行末を案じらるゝ不肖の子も、世間の他人には知られぬ涙の親心、

一五二
まして有餘る財産と名譽の家不肖ならぬ子を持ちて、その子また不孝ならざるに家を去り産を嗣がざる親心、なほさら世間の他人に知られぬ涙深し、
加之も其子の妻なるもの、シツとりと睡れる如く静なる中に物事の疎からぬところあり、いちらしく打沈める哀れの中に心の雄々しきところありて、天生の容貌さらに畫ける如き風情、どこに一點の瑕瑾なき珠玉とすれば、この夫婦を家の外に置いて朝夕に見られぬ親心、老の寢覺にも忘らるべきや、

番町の屋敷に奥深く老の身を持って餘せし松川子爵、急に座を立ち

手を叩いて、

「これ、誰か居るかな」

廊下を通りかゝりし三太夫、障子を開けて闕際に、

「は、何か御用で」

「乃公は今日、これから出るよ」

「お馬車を」

「いや、歩いて行く」

「いづれへ、お供を申し付けます」

「供は入らないが少々、金が入る、出してくれ」

「お徒歩では、あまり、また金子は、いかほどで、どういふ事に御入用で御坐いますか、一應」

「どういふ事でも、乃公が入るから、五百圓」

「は、五百圓、もし御買物でも御坐いますれば、猶更ら、お供を」

一五四

「うるさいな、五百圓、出せんか、出せなければ宜う」
ことし六十の阪を越せし老の身は、今日なほ残る昔の大名氣質、
墨ざはり荒く其まゝ座敷を出でむとする勢ひに、三太夫、はつと
驚いて脚下に平伏、

「御前、暫く、只今、すぐに」

「出すなら早く出せ早く、時間がある」

大名の家に九太夫は禁物ながら、三太夫こゝに三人、内々そつと

額を鳩めての評議、

「どうも近來、御様子が變つて、まゐりましたぞ」

「さやう、をりゝお徒歩で不意に何處へ、お越しになりますかな」

「わけて今日の御様子、我々に於て此まゝでは相済みませんな、外様は兎も角、御當家に限って一切これまで金錢上に、あたづさはりなかつたのが急に、さも待遠に仰せられて、五百圓」

「事に依ると、或は、例の、初音町へでも」

「や、たしかに方角は、あたりましたな、それでなくて、どうも御自身あゝ不意に急な御入用のある筈は御坐いませんな、いよゝさうとすれば、御親子の間柄、萬々お察しは申し上

一五五

げても、お家にとり取って將來、甚だ掛念に堪へません、第一は
た御相續人となられた御次男様に對しても、お互我々の落度
に相成りませう」

「全くの儀で、これは此まゝに置かせん、加之も御總領が、
あの通りの御氣質で、お家柄も何も捨て、飛び出されるやう
な方ですから、猶更ら以て、うかと出来ませんよ、それに御
前が萬事あゝいふ大様に在らせられて、その上また身分も素
性も知れない女が居るとすれば、ますゝ容易ならん次第で、
今後、いかやうな大事が起らないにも限りませんからな」
「過日、郵便の張紙に書いて出した山村キタといふ、その女が
第一、曲物かも知れませんぞ、まづ御總領を首尾よく引き付
けて置いて、また更に御前を呼び寄せるといふ手段で、事を

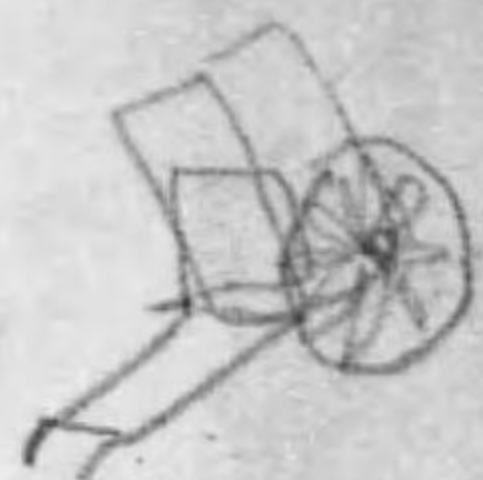
巧む下種女には得て、よくある業ですからな」

「いや、そのみでなく、さういふ女には必ず影に、わるい附
き物があつて、いろゝと絲を引きますから、うかゝすれ
ば御親子もろとも、大變な事になりませう」

「つまるどころ、その女が災禍の基ですな、何とか致して其女
を退ける方法は、ないものでせうか」

「いや、お待ちなさい、急いでには却つて事を仕損じますから、
ゆるゝお互に御相談いたして、免も角も、其女を退治ませ
う」

あはれ花の露に月の宿れる如きキタ女も、三太夫どもの口の端に
かけられては、退治さるべき化物扱ひなり、



門口に俥の停まりし楫棒の音、つゞいて戸を開け、内に入りし足音、
をりしも老少の下女に手の放されぬ用を言ひ付けしキタ女、みづ
から出で、見れば、父の廣道、にこやかに、

「また来たよ」

「あや」

無量の尊敬も、無量の有難さも嬉しさも、只この一言に盡きしが
生憎、廣行は二階に午睡の夢、鄰席の六疊はあれど八疊の座敷一
個、良人を起せば父を待たせ、父を通せば良人を起されず、内憂
外患、一時に迫るが如き苦しみ、例の太く濃き眉を寄せて、いよ

く張りきる目元に上下を見ながら赧らむ顔、

「どうか暫時、とり散らして居ります」

かけ上りて良人の耳に口、

「お父様、お父様ですよ良人」

ゆり起す間もなく抱き起されて、流石の廣行も聊か狼狽の體、坊
主枕を抱へながら鄰席の六疊へ遁げ込めば、キタ女、あとに残り
し毛布を突き入れて襖を閉て切り、また下に降りて跪き、

「お待たせ申しあげて、恐れ入ります」

父の廣通、満面に溢るゝばかりの微笑を浮かべながら、人しれず忍
び来れば猶更ら思ひ増して、これ以上の望みも楽しみもない心地
に眼を細めながら、

「今日は廣行、居るかな」

「は、只今」

座を迂りて板間より鄰席へ、出違ひに良人の背後、そつと羽織の襟を折り直せば、見向きもせず其まゝの廣行、父には今年の上野に花以來の今日が始めて、

「お父様、御機嫌よろしう御坐います、度々お越し下さいました、が、いつも生憎不在で、何とも申譯、御坐いません」

「は、ついで、かうして、ちよいと来るやうになつたよ、ところで、汝も達者だね」

「有難う御坐います、身體だけは、御覽の通り、相變らず、ますく壯健で」

「え、これで乃公は四度、來たね、三度とも汝は居らないが、しかし妻は萬事に優しく行届いたもので、汝の分まで勤めて

くれるから、いつも氣持よく歸る」

「幸福もので御坐います、あいキタ、お茶を」

「いや、さう急ぐに及ばん、今日はね、ゆるくとして、

何か夕飯を、汝達に御馳走して貰ひたい、俵を歸さう、九段から乗つて來たよ」

キタ女、鄰席より無言のまゝ降りて、門口に待てる車夫の値を聞き、いふがまゝに取らせて再び上り來りぬ、

「お俵、歸しまして御坐います」

さらに聲を潜めて、

「良人、御夕飯と仰せられました」

「む、何か、汝、考へてね」

「この邊の、お料理では逆も、お口に」

「さうでないよ、お父様は汝に何か、せよといはれるんだ、妻は、ちよいと手料理も致します」

「あら良人」

「は、その手料理が宜い、外から一品も取っては、いけな
いよ、ありあはす食物で、汝達と同一に喫べよう、は、愉快だね」

どう致しませう、茶器を良人に託し、この一言を残して其ま、下に降り行きしキタ女、臺所に入りて、裾を引き上げ、白き前掛と禪を手に持ちながら、思はず小首を傾け、さアいよ、世話女房の大役、時も時、わけて折あしく、さのふ今日は近來にない大不漁、二階には久しぶりの父子、互に膝と膝とは離れても、自然の血は

通うて心と心の打解けし物語、

「廣行、當分まだ此ま、何もせず、居るかね」

「いや、實は、お父様、この廣行、かうして居りましても、決して頭腦の中は、遊んで居りません」

「その邊は、乃公も知って居るが、やはり氣になる」

「相済みませんが、こゝ暫時で御坐います」

「しかし全體、どういふ考へで、何をする覺悟だね」

「はい、お父様に對して別段、秘すべき事も道理も御坐いませ
んが、御先祖以來の名門に生れて、不肖ながら、じつとさへ
して居れば長男で立たる、答の身分を、わざと好んで今日、
かういふ境涯になりました廣行は、たゞ華族といふ名譽と體
面に縛られる窮窟を脱れて我まゝを仕たいためでは御坐いま

「それは、わかッてるよ」
 「今日のところは只、この點だけ、あわかり下さいまして、それ以上は、お父様、どうか、もう暫時、いづれ近い將來に於て、具體的に申し上げる覺悟で御坐います、廢嫡されて家を出ても、松川家の子たるに愧ぢないだけの事は、廣行、きつと御覽に入れます、第一また恐れ多くも皇室の藩屏たる華族には、その仕事の上に華族を去るべき理由のある廣行よりは、陛下の軍人たる弟の廣國が當然の主人となる等のもので御坐いませう、この點からも松川家は、長男を廢して次男を立てた事に何物の議論を挿む餘地が御坐いませう、お父様、華族は人生の最も單純にして加之も最も高潔なる職にあるものが

嗣ぐべき筈で、廣行の如き複雑の社會に何等か自個の主義を行はんとする人間は、寧ろ華族そのものゝ權威と安泰とを損ずる恐れがあります」

「なるほど、さういへば、さうだね」

「ですから、お父様、兄の廣行が去つて弟の廣國が相續する松川家は、華族として最も立派な意味を明白にして居ります、さらに廣行が他の方面で、もし幸ひに生れた家を辱めないだけの仕事をすれば、兄弟のく相分れて、その所を得るでは御坐いせんか、たゞ廣行は今も申し上げました通り、何をするか、具體的に御覽を願へるまで、こゝ暫時の間、此まゝお見通し下さいませうやう」

「よし、それで猶よく、わかッた」



「ところで、お父様、思召しは幾重にも有難う御坐います、
屋敷の者どもは、かやうな理由も何もなく只、お家大切に存
じて居りますから、既に廢嫡した廣行の借屋住屋へ、かう度
度も越しになりましては、却って」

「それは、かまはン、乃公の勝手だよ」

「無論、さうで御坐いますが、やはり當分の間、第一お父様の
ため、また過日はキタに、いろ／＼おみやげを下さいまして、
あゝいふ事は猶更ら」

「それでは乃公に今後、こゝへ来るなといふのか、来ては迷惑
になるのかね」

「いえ、決して、困りましたなア、お父様」

「もし汝が面倒なら汝に逢はなくても宜い、妻に逢ひに来る、」



妻は乃公の氣に入つたよ、廣行、もし妻を粗末にすると乃公
が承知しないぞ」

廣行、剛に立つが如く無言のまゝ、會釋して其場を遁げ出し、今や
臺所に一所懸命の妻が傍

「あゝ／＼まだか、急いで早く出せよ、どうも乃公は、いかに
汝に限る、うまく始めは話し込んで居たがね、ちよいと機嫌
を損じた」

「あら、どう遊ばしたんですよ、キタは今これですもの、まだ
手が放されません」

「なアに飯は後でも宜いから汝、ちよいと顔を出せ、どうも乃
公なかと違つて道中の行列時代に生れた阿父だからね、わ
かッてるやうで、をり／＼困る事があるよ、はゝゝ、兎も角

も汝が出れば、すぐに直る」
襟を外し前掛を取り裾を引き下して、鬢の毛を撫で上げながら、
静に沁り入る額越し、

「只今、御夕飯を差上げますが、此お料理人、甚だ不手際で御
坐いますから逆も、お召抱へにはなりませんまいと、存じます、
ほゝゝゝ」

才色の外、温情の外、これが俗に相性といふものか、父の廣道、
音なき春風に誘はるゝ心地、

「はゝゝゝいろゝ厄介をかけるね、心配は入らないよ、廣行、
どこへ行つた、彼奴、乃公の來るのを迷惑らしく」
「まア、勿體ない事を、御意に觸りましたところはキタが萬々、
あわび致します」

「乃公にさへ、あれだからね、汝には定めし無理な事をいふだ
らうな、さういふ時は遠慮なく叱つてやらんと、いけない、
第一、くせになる」

「では、すぐに今お叱り申してまゐります、ほゝゝ」

「はゝゝゝ叱つてやれ、叱つてやれ」

今日のキタ女は上と下との大役、身一個を千々に碎いて、また臺
所へ馴け入れれば、

「どうだ、すぐに直つたらう、前世は、汝の家來筋で忠義の盡
しやうが足らなかつたんだね」

「御完談ぢや御坐いませんよ、折角あゝして入らッしやるのを
良人、何と御心得あそばすの、迷惑さうに」

「こりやア遣り切れない、上下の夾撃だ、はゝゝゝ」

今日だけは汝達、わたしを助けておくれよといふ優しき言葉の下に、二人の下女を隙間なく諸方へ走らせ、時は五月の季節、筍、時、蕨、ほそね大根、鶯菜、この五品を膳に整へ、一切の魚類を避けて差出だしぬ、茶の心得はキタ女に取りて第一の藝、自然に會席の手筋ありて、まづ父の前、良人の前、その身は亭主役を兼ねた給仕人、廣道、一目ちらと膳部を見て、

「これは、なか／＼お手際、うれしい御馳走だね」

「まことに、不加減で御坐います」

「どこやら不味公の癖がある」

「恐れ入ります、良人、お招伴あそばせ」

「廣行、いろ／＼心得のある妻だね」

「ところが、お父様、廣行には、いつも出来損ひのフライとかライスカレーとか、いやにバタ臭いものばかりで、かういふものを食はしてくれません」

父子夫婦もろとも三人、おもはず聲を揃へて、どつと一時に笑ひ出しぬ、

金屏風の内に生れて、儀式めいたる家風に育ち、ことし六十の阪を越ゆるまで出入ともに函詰の如き身が、我子の假住居に誰憚らず打寛ぎ、優しく哀れげの妻に心づくしの夕餐を給仕され、かゝる事は始めての廣道、箸を取りながら三人ともに思はず笑ひ崩れし樂しさ、うか／＼すれば父も屋敷を出で子爵を捨て、此まゝ此家の男になりた氣なり、夕餐も終りて、食後の茶も済みし後、廣行、頻に軒端より空を見

上げながら、

「お父様、もう遅くなりませすよ」

「汝は黙ッて居れ、乃公は歸る時に歸る」

「ですがね、屋敷で、また心配いたしませう」

廣行に見向きもせず、キタ女に向うて微笑を浮べ、

「今日は、忙しい目をさしたね、今度、來る時は何處か外で、

乃公の方が御馳走しようね」

「はい、ありがたく、お供を致します」

「少し東京を離れて、どこか景色の好い料理屋があれば、考へ

て置いてくれ」

そろ／＼市外へ遠出の氣、夫婦おもはず眼と眼を見合はせど、それを唯一の楽しみに我身を起せし父、

「近來にない、ゆツくりとしたよ、では歸る、汝は廣行そのま
まに居れ、妻が送ッてくれる」
わざと我子を其場に置いて、送り出だせしキタ女を振り返りながら、
そツと一封の紙包、例の五百圓、

「廣行にいふな、これはね、汝に何か買ッてやりたいが、乃公
に、わからないから」

戻しても取る筈なく、たゞ無言に泣いて押戴き、門口まで送り出
だすや否、忽ち引返して二階へ駆け上り、

「今日は良人お見送り遊ばせ、いゝえ、もう御機嫌は直ッて居
ります、お屋敷の御近處まで、暮れませすからね」

前後二臺の俵を飛ばして番町の角まで父を送り届け、その身の歸途は電車、ぶら〜と白山前より歩みて、歸り來りしは夜の七時過ぎ、廣行、我家の門口に近ければ、頻に二階を見上げ階下の入口を差覗く宵闇の人影、黒く動いて、づか〜と不意に進み寄るや否、はッと驚いて逃げ出す途端、慌て、小石に躓きしが、ばたりと倒れし上より押へ付け、びしやりと隻手のスラッキに打たれぬが此奴の僥倖、

「こらッ、きさまア何だ」

「は、恐れ入ります、どうか」

「あやッ、杉浦ぢやアないか」

「は、は」

「何しに來た、まさか廢嫡の乃公に御機嫌うかがひでもなからう」

其ま、引き起せど、肩口を掴みし手は放さず、普通の若殿様でない實は自慢の腕力、

「まア兎も角も家へ這入れ、番茶でも飲ますよ」

「いづれ、あらためて、伺ひます、どうか此ま〜」

「いや、放さない、折角こゝまで來て、きさま、さういふ挨拶があるか、是非とも這入れ」

さらに大喝一聲、

「來いッ」

何事かと耳を澄ませしキタ女、今の大聲に驚いて駆け出し、

「良人、どうなさいましたの」

「今ね、乃公が歸つて來ると此奴が門口に、うろくして居たから取ッ捕へた、こりやア屋敷の家來で杉浦といふ奴だよ、こら這入れ」

無理に引きずり込まれて二階へ押し上げられ、顛へながら片隅に居縮めば、冷かなる微笑を浮べし廣行、

「あゝ杉浦、きさま、世間しらすの小さい古い頭腦で、をかしく妙に變な忠義立を考へ出しちやア、いかにぞ、すべて世の中が廣く大きくなつて、今日は昔の大名でない、たゞ華族といふだけのこつた」

「は、は」

「たとひ昔のまゝの大名にしたところで、まだ杉浦、幸ひ松川家には、きさまが夜、人の家を窺つたり覘つたりして忠義立

するやうな、お家騒動も何もないぞ」

「は、は」

「はッく」とばかり言はずに何とか返答せよ、全體、今ごろ乃公の家を、きさま、どういふ理由で、どういふ必要があつて窺つた、竊盜に來たとも思はないから安心して、ありのままに言へ」

「は、申し上げます、實は、御前が、もし、お越しではなからうかと存じまして、内々、お迎ひ、かたぐ」

「どうせ、さういふだらうな、は、は、は、お父様が今日こゝへ來られたのは來られたが、内々お迎ひ、そりやア嘘だ、は、は、は、お迎ひに來る奴が馬車も傳も廻さずに、きさま一人が何のため内々お迎ひに來るんだ、第一また身を忍んで猫が肴を取

るやうに、あの闇がり、あんな、お迎ひがあるかい」

「ひらに、何卒、ひらに重々、御わびを申し上げます」

「ささまの考へは、わかッてる、わかッてるが今この乃公は黙ッてるから、あまり見當違ひに立騒がないやう今後、よく氣を付ける」

「は、は」

「いくら父子の情愛で、お父様が来られてもね、もはや一旦、家に對して廣嫡の廣行は、家のため自分のため決して屋敷へ再び用がないから、よけいな心配するな、おいキタ、ちよいと来てくれ」

わざと階下に差控へしキタ女、呼ばれて入り来りぬ、

「杉浦、それが乃公の妻だ、お父様にも度々お目にかゝッて、

いろく御深切にして貰ッてるよ」

化物退治の發頭人は此杉浦、逆さまに生捕られて恐縮の額越し、おそる／＼見れば瞬眩き絶世の美人、加之も自然に氣高く品位あれど、少しも高ぶらぬ慇懃の挨拶、

「初めて、御意を得ます、キタと申します不束もの」

「は、は、これは、は、これは、は」

「まア貴君、お羽織の袖が砂だらけに」

砂だらけの筈なり、門口に捻ぢ伏せられて其ま、引きずり込まれし杉浦、背を拂ひ袖を拂はれて、ます／＼恐縮の體、優しく白き手も鬼の鐵棒に打たる、心地、さりとして遁げ廻れず、いよ／＼居縮んで頬に兩手を宙に振りながら、

「これは奥さま、どうか、此ま、お捨て置きを、は、は」

廣行、笑ひながら其の煙を吹いて、

「あゝ杉浦、夕飯を食ったか、まだなら出してやるぞ、どうだ

さ」

「は、いたゞきまして御坐います」

「こゝへ来る途中で食ったのか」

「いえ、お屋敷で」

「は、ア、食ふ事は忘れずに食って来たんだな」

ぎゆう／＼いはされて、五十面に膏汗を流し、やう／＼逃げ歸る

出口までキタ女に送られ、ひよろ／＼しながら、

「奥様、どうか宜しく、あわびを」

其十一

帝大出身の同窓會員中、あまり名聲噴々たらず従うて事件も多か

らざる辯護士連の七八人、

ゆうべ池の端の待合に夜討をかけて、あの／＼敵の女武者を歸せ

し今朝、宿酔いまだ醒めざる朝酒に、今夜またいづれへか戦場を

變へて再び出陣の評議、

「まづ今日は日曜で、お互に勉強したくつても出来ない日だ、

ぼんやり此ま、暮らしちやア策が無さ過ぎる、どうだ諸君、

あもしろい考へは絞れないかね」

「只これ兵站部の一事だよ、武器も戦鬪力も充分、あり餘ッて
るがね」

一八二

「はい、あり餘ッてるから困るんだ、しかし此ま、脾肉の歎
に了るのも残念だな」

「や、諸君、名案あり名案名案、頗る名案がある」

「折角だが君の名案と君の原告に、いまだ曾て功を奏した凡例
がない、いつも被告側に功を奏して遺憾なく復讐の義務を盡
してゐるからね、はい、はい」

「ところが今日の名案は忽ち言行一致の名案だ、知らずや諸君
この池の端の近くに我々のため豊富なる兵站部があるぜ」

「はてね、どういふ理由だ」

「こりやア近ごろ田島に聞いたんだが、例の松川廣行ね、あれ

が居るよ、彼奴、華族といふばかりでなく、學校時代から妙
に超然主義を取って、其くせ不意に、をり／＼悪戯けた真似
をする奴だッたが、どうしたのか近來、廢嫡されて初音町に
住んでるさうだ、加之も君、見通すべからざる事が二件あえ
その一は彼、我々と同じ級から出て五年の今日まで、いまだ
一度も同意會に面を出した事がない、但し會費だけ送ッてく
るのが生意氣千萬だ、癪に障るぢやアないか、さらに他の一
件は、けしからんぞ、たとひ華族は止めても此女ばかりは止
められないと、誰に向ッても大びらに惚けるほどの女があッ
てね、現在その女と同棲に、うき世の風は何處を吹くといふ
調子に暮らしてさうだ、過日、久しぶりで田島が逢ッた時
も、のろけ交りに誇大妄想狂のやうな怪氣焰を吐いて、我々

一八三

この同意會を罵倒するに、ありやア世の中に狼狽へて集まつたどうしよう會だと吐したさうで、田島ア僕に眼を刺いて憤慨して居たよ」

「そりやア聞き捨てにならんぞ、初音町の何番地だ」

「番地は聞かなかつたが、なアに直ぐ分るだらう、たしか山村とかいふ女名前だと言つた」

「あもしろい、その罰金に引ッ張り出して、ランと奢らしてやらう、我々八人で包圍すりやア通さない、いくら彼奴だつて、まゐるよ、この中で誰か使者に立たないか」

「いや、わざわざ使者を立てるより俵で迎ひにやる方が宜いね、手紙を持たして」

「手紙は、無効だ、いけない、遁げるにも、断るにも自由だか

ら」

「たゞ手紙ぢやア無論、無効だよ、しかし我々八人の連名で、

もし來られなければ押掛けて行くといふ文意さ、ね、さうい

ふ女と小意氣に洒落てる中だ、押掛けられて堪らないから嫌

でも、やツて來る、來れば占めたり、もう此方のもんで、袋

の鼠、釜中の魚だ、は、は、は、」

「決定決定、それに決定した」

「よし當ツて書記は誰だ」

「書記は酷いが、この中で文章家は僕だよ、この通り考へな

くツても筆を執れば、さら〜と巻紙に音するばかりで、か

らいふ工合だ、早いだらう」

「なるほど筆は早い、意味は通じてるかね」

「黙ッて、黙ッて、さア出来た、此まゝでも宜いが念のため一應、勸進帳で読み上げるよ、拜啓、爾來久敷御無音に打過ぎ候へども時下ますく御清適の段を承知いたし候と共に庇ながら艶福の御近状また羨望の至りに不堪候、ついでには我々八人こゝに小宴を相催し候間萬障御縁合はせ御來臨下され間敷哉、もし外出御差支御坐候は、我々當方より打揃ひ拜趨可仕候、どうだ、うまからう、もし外出御差支といふところは前の艶福云々に照應して、全文の骨子こゝにありだ、我々がら名文だな」

「は、は、は、あまり名文でもないが、まアそれで宜いとして、すぐ車夫に持たしてやらう」
「しかし置きッ放しでは、いけないせ、その俵へ本人すぐに乗

ッて来ないとすれば、兎も角も返事を取ってくるやうにね」
「無論だ、ところで、どういふ返事が来るだらう、面白いね、こりやア愉快だ」

池の端より初音町まで車夫の脚に往復の時間、三十分も要せり来りしが、果して空俵、されど女中の取次ぎし返書に、もはず膝を乗り出して見れば、洋紙にペン先の走り書、久々にて諸君の御手紙を拜見いたし候、早速推参の御元來の天下戸は、却ッて折角の御酒宴に座興を興へまた打揃うて御尊來の節は目下の借屋住居に二階下客室と御承知下されたく候、但し久瀾の友情の儀承りたく候間もし御晝飯の席を小生に御返りばいづれか他に御用意可申上候、折返し御返

八人の内、三四人は思はず互に顔を見合はせ、あと
を組んで首を捻りながら、

「どうだい、この返事は、何だか妙に此方が、やられ
気がするせ」

たような

なら来

「つまり下戸だから酒の場に行かない、もし八人で来る
ても宜いが四疊半へ押込ひど、しかし晝飯なら奢ってや
といふんだ」

「加之も折返して、すぐに返事しろは、けしからんね」

「かまはない、やけだ、八人で四疊半へ坐り込んでやらうぢや
ないか」

「此方は坐り込んでやつた覺悟でも、向うは押込んだ覺悟で居
るよ、第一それで食はず飲まずに奴の氣焰を聞かされたり、

は我し
らす

ちら／＼女の影を見せられたりして、たまるかね、は／＼、
病氣になるぜ」

「全くだ、警察で拘留せられた方が寧ろ優勝だ、あきらめが付
くよ」

「しかし何とか返事を仕ないと、此ま／＼ぢやア敵の逆襲をうけ
て凹垂れたやうなもんだ、鯨蛇に驚いて尻餅を搦いたと一般
だせ」

「いッそ彼奴のいふ通り、どツかで、ランと贅澤な晝飯でも奢
らしてやらうか」

「残念ながら僕なんかア昨夜以來の酒びたりで、この二日酔に、
さうは食へないよ、もし彼奴のこツたから意地わるく、こて
／＼と眼前へ洋食でも出されちやア、殆ど責苦だ、むか／＼」

して嘔くね」

「悪い文章家、つまり君の名文が失敗の基だせ、久しぶりで舊情を暖めたいとか何とか敬意的に先の遁れツこないやうに書けば宜いものを、我々八人こゝに酒を飲ンでるとか、つまらない艶福云々と外出云々の照應なんかするから無効だよ、現在この返事を睨ンで八人が腕を組ンだ工合、よほど先の方が名文だせ」

「味方の同士討は禁物だ、名文争ひは借置いて、さし當り多数決で返事することに極めよう」

「どう極める、返事の遅くなるだけでも彼奴に内兜を見透かされる理由だ」

「かうなると、考へるほどいけないよ、上策は策なしで、さッ

くばらんに見ナマの無心でも吹ッかけてやらうか、露骨に、ひきだしに、昨夜からの勘定が足りないから幸ひ近くの君に一時の立替を頼むとね、どうだらう、一人で眞面目に金の事は面白くないが、八人から揃ッて待合の勘定だけに却ッて罪がなく聞えるぢやアないが」

「寧ろ天真爛漫で、それも宜いが、彼奴また天真爛漫に、はつきりと未練氣なく斷ッて来た時は、どうする、いよく拙いせ」

「さう君、消極的に考へ込んぢやア我々八人、謝罪に行くより仕方ないせ、はゝゝゝ」

「兎も角も百圓、ぶツかけろ」

「賛成賛成、しかし今度は文章家の名文、無効だ、僕が書く、